

このやうに 後鳥羽上皇は、新古今集の編纂を非常に御念慮にかけさせられたのであるが、この新古今集の雑歌の下の初めに、菅原道眞の歌が十二首並んで出てゐる。これは何れも道眞が太宰府で詠み出でた作品と見えて、その歌の中には、自然の景物に托して自己の偽らぬ心情を歌つたものが多い。例へば山を詠んでも、

あしびきのかなたこなたに道はあれど都へいざと言ふ人のなき
と歌つて、都に歸ることの出来ない己が身の上を悲しみ、雲を詠んでも、

山わかれ飛びゆく雲のかへり来るかげ見るときはなほ頼まれぬ

と、なほも都へ歸る希望を捨てずに、はかなき頼みを雲の去來に懸けてゐるのである。さうして野といふ題で、

つくしにも紫ふる野邊はあれどなき名悲しぶ人ぞ聞えぬ

と、無實の罪を悲しんでゐるのであるが、このやうな歌がここに集められて出てゐるといふことの中には、編纂に意を用ひさせられた 後鳥羽上皇の深い御心をお籠めになつたところがあるのであらう。道眞の眞情は、大鏡に依つてもたたへられてゐるが、又この新古今集の如き

勅撰集に依つても、明らかに歌はれてゐるのである。

新古今集以前でも、金葉集は 白河上皇の御命に依つて、源俊賴が編纂したものであるが、この金葉集は三度編纂をし直した。初めに編纂したものは、新しい傾向の俊賴の撰であるに拘らず、古い時代の歌人の作が多かつたので、改撰を命ぜられ、二度目に編纂をしたものは、反對に稍々新しい傾向に偏したので、又々改撰を命じさせ給ひ、三度目にいたつて 上皇の御思召に適ひ、御嘉納になつたのである。

このやうに、單に命じ給うて、その編纂を撰者の責任においてすべて任せておしまひになるといふだけではなく、天皇、院の御思召もそこには十分籠めさせられてゐるのであつて、その御思召を伺ひつつ、編纂の事業が進められて行つた、といふ事實を理解しなければならぬ。勅撰集の權威があつたのは、即ちこのやうにして御思召が、直接に働かせていさせられたといふところにある。それで西行のごとき脱俗の僧でさへも、勅撰集にその歌を入れてもらふ爲めに、藤原俊成のところに、自分の詠歌を書き集めたものを、編纂の材料として送つたりしてゐるのである。或は又平家物語にも出てゐるやうに、平忠度が、その歌の勅撰集に入ることゝ衷

心希望して、都落をするに當り、わざわざその作歌を師の俊成のもとへ届ける爲めに、引き返してゐるのである。併し、今は、敵方となつた平家の落人の作であるから、わざと作者の名を隠して、詠人知らずとして出されることになつた、といふやうな話の中にも、當時の人々が勅撰集を尊んで、これに入ることに非常な喜びを感じた氣持が現れてゐる。

このやうに勅撰集は重んじられたけれども、次第に勅撰集の權威が失せて、中世以後、武家の時代となつては、武家が政權を握つた爲めに、一層歌に對する尊敬の情が少くなつた。ただその間にあつて、鎌倉三代將軍の源實朝の如きすぐれた歌人が出た。實朝は藤原定家に歌の教を受けるやうになつて、新古今風の影響を受けたが、初、自ら萬葉集を讀んで大いに悟るところがあり、情熱を力強く表現するとともに、雄渾、壯大な精神をもつて、

おほ海の磯もとどろによる浪のわねてくだけてさけて散るかも

物言はぬよものけだものすらだにも哀なるかなや親の子を思ふ

のごとく豪宕な自然や暖い愛情を詠み出してゐるといふことは、實に武家の歌人として異色あるのみならず、歌の歴史の上においても、傑出した大歌人と言はなければならぬ。

賀茂真淵が「爾比末奈妣」(新學)において、

鎌倉の大まうち君の哥は今の京この方の一人なり。その體いにしへにかなひたれば、たまく古今哥集の言を交へ用ゐ給ひしすら、似つかず聞ゆるに、本の心も調も勝れて高き事知られたり。さて此公、宮根道を吾こえ來れば、ものゝふの矢並つくるふ、などの、よに勝れたる多かるは更にも云はず、こともなく聞ゆるに、此ねぬる朝けの風にかをるなり軒ばの梅の春のはつ花。玉藻刈る井手のしがらみ春かけて咲くや川邊の山吹の花、などの本末のいひなし、且打有ることをわざといはれつる末のしらべの心高さをみよ。また梅開脈雨てふ題にて、吾宿のうめの花さけり春雨はいたくなふりそ散らまくもをし、と詠まれしを思ふに、其頃京に哥詠む人、皆進心もて巧みにくしつゝぞ在らん、いで古へぶり詠みて見せんよとて、天の下の哥よみを見下したる心も、おのづから見ゆ。

と評してゐるのも、實朝の價值の適確な發見であつて、誠に真淵のたたへてゐるやうに、實朝は中古、中世を通じての第一の歌人と言はなければならぬ。

實朝と並んで勝れた歌人は、西行法師である。萬葉集を除き、中古、中世に互る歌人として

は、この二人を代表的な歌人として擧げるに足りるであらう。

西行法師は、鳥羽上皇の北面の武士であつたが、早く世を逃れた。その出家隱遁の理由に就いては、種々の傳説が傳へられてゐるが、要するに朝廷の勢威の衰へさせられて、武家が跋扈することを慨歎し、且又、上皇の崩御などを悲しみ奉つての出家であらうと思はれる。爾後自然を友として、悠々自適、保元の亂の結果、讃岐において崩御あそばされた崇徳上皇の白峯の陵に詣でて、ひそかに尊き御身をこの悲運の中に終らせられた御運命を歎き悲しんでゐる。かういふ心の中にも亦西行の思ふところが窺はれるやうである。

又西行は、東大寺が源平の亂の結果焼失したので、その再建の爲めに奥州の藤原秀衡に勸進に出掛けた。秀衡の領内からは砂金が出て、中尊寺に金堂を建てたくらゐるの富裕であつたので、東大寺建立に就いても援助を得るつもりであつた。この東下りの途中で、鎌倉幕府に頼朝を訪れて、銀の猫を引出物に貰つたが、屋敷を出ると、直ぐに路傍の子供に、それを惜し氣もなくくれてやつたといふのは、名高い逸話になつてゐる。

このやうにして奥州に行つたのであるが、多分義経もその頃秀衡を頼つて、奥州に下つてゐ

たのである。若し義経と西行が出遭ふといふ話があれば甚だ興味も深いのであるが、西行は當時奥州の櫻の名所であつた平泉の東稻山の美しい櫻の景を歌に歌つてゐるのみで、その他の消息には遂に觸れてゐない。要するに、幕府に對して一敵國をなしてゐた奥州の豪族秀衡の存在は、志を得ない義烈の士の、身を寄せるのにふさはしい大樹の陰であつたかと思はれる。

西行は長い間、伊勢に住んでゐたので、皇大神宮を尊崇し奉る歌を詠んでゐる。

何事のおはしますかは知らねども忝なさに涙こぼるる

は有名である。その外にも、

とくゆきて神風めぐむ御戸みと開けあめのみかげに世を照らしつつ

と、神風の吹くまにまに 天照大御神の御恩徳の廣大な御恵みのほどをたたへ奉り、又、

みやばしらししたつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日のみかげかな

と、清らかな御神殿を仰いで信仰すること深く、而して、

世の中をあめのみかげのうちになせあらしほあみてやほあひの神

と、天下中が天恩を蒙るやうに、汚れを拂ふ神に祈願してゐる。これらの作の中にも、武家

が權勢を恣にする世情を慨歎する西行の精神が見られるやうである。

西行の歌は自然を詠んで、その真相の中に自己を没入させた勝れた歌が多いので、萬葉集の山部赤人以後の自然歌人であると言はれてゐる。

松風はいつもときはに身をしめどわきてさびしき夕暮の空

松風の音あはれなる山ざとにさびしさそふるひぐらしの聲

とか、自然の靜寂の境地に徹底して、その本然の相を明らかにしようとした、平明な中に含蓄の深い歌がその特色である。然し西行は又、

うなるこがすすみに鳴らす麥笛の聲におどろく夏の晝臥し

のやうに、少年時代を追想した、無邪氣な中に清らかな感情のこもつてゐる歌なども一方では種々詠み出してゐるのである。

このやうにして、西行といふ歌人の存在は、當時の歌壇の中にあつては、ただひたすらに歌の生活を樂しみ、これのみに凭りすがつてゐたらしい、最も勝れた歌人の姿として、又、最も歌人らしい歌人の魂として、これを見ることが出来る。

併し西行も亦一方においては、歌壇の關心がなかつたわけではなくして、俊成や定家に、自分の作つた歌の批評を乞ひ、又勅撰集に、その歌が入撰することを、非常な名譽として、甚だこれに喜びを感じてゐたのである。

總じて勅撰集にその歌の入ることを榮譽としたのは、當時の歌人の共通の心理で、かういふ觀念が一般に行はれてゐる間は、勅撰集が最高の權威を持ち續けることが出来たが、鎌倉、室町時代に及んでは、その氣持が薄れて、一方では勅撰集に對して種々の非難や、不平を洩らす者もあるといふやうになつて、次第に勅撰集としての權威が落ちて行つたのである。そこに歌の墮落もあつたと思はれる。

ただその間にあつて、正しく歌の精神的効果を發揮することが出来たのは、吉野の朝廷の歌であつた。

吉野の朝廷の方々が詠み出だされた歌は、その悲痛な歴史と相俟つて、われらの心を打つことが切實である。さうして、宗良親王は、當代を代表する歌人であらせられた。新葉集を編纂して、吉野の作歌が、京都で編まれた勅撰集の中には入らないことを慨嘆せられる御心を、こ

れによつて満たさうとあそばされたのであるが、信濃に北陸に又關東地方に多くの生活の勞苦を忍び給ひつつ、時あつて、撰集を編まれ、御みづからも李花集を遺して居られるのは、ひとへにこの道に御心を傾けさせられてゐた親王の熱烈な御努力によるものである。新葉集卷十八に出てる、次のごとき宗良親王の御歌は特に有名である。

東の方に久しく侍りて、ひたすらものふの道にのみ携はりつつ、征東將軍の宣旨など下されしも、思ひの外なるやうに覺えてよみ侍りし

思ひきや手もふれざりし梓弓起き伏し我が身馴れむものとは

同じ頃、武藏の國へうち越えて、こでさしなどいふ所におりて、手分など侍りし時、いざみあるべきよし、つはものどもに召し仰せ侍りしついでに、思ひつづけ侍りし

君が爲め世の爲め何か惜しからん捨ててかひある命なりせば

と「ものふの道」に立たれた凛然たる氣概をうたはれて、かの「弓の本末を知らぬ」藤原隆家が刀伊の寇に向つたごとく、金枝玉葉の御身として、「手もふれざりし梓弓」を常に携へて朝敵に向はれた御志の雄々しく氣高い御表現を、この御作が十分に示してゐるのである。

歌はこのやうに、眞實の精神の現れであつて、爲兼風の新しい歌の傾向は、むしろ京都方の間で行はれ、爲兼を貴んだ今川了俊のごときは朝敵に屬して忠臣の菊池氏などと戦つた武士である。さうして、舊風の正統を、むしろ吉野の方で傳へさせられてゐた。併しその間から、苦難の心情が、眞實の歌を生み出して來たことを思へば、到底歌は舊風新風の差別に價値があるものではなくして、道徳と精神の間から、その清らかな光がおのづからにして明かに輝くものである。かうした吉野の朝廷の歌の傳統は、更に江戸時代の新しい歌の間に流れて、維新の志士に受け續がれて行つた。

五、日記・隨筆

日記は日録とも言ひ、漢語より出た言葉で、「にき」と呼ぶが、物語や歌といふやうな名稱とは、稍々性質を異にしてゐる。つまり日記といふ語は漢文から來たものであつて、純粹の日本の文學として上古から存在したものではない。従つて日記は始めは漢文で書かれてゐて、貴族達はすべて漢文で日記を記したものである。後にはその漢文を上手に作る事が出來ないので、次第に和臭を帯びた漢文となつた。即ち上下に返つて書くべきところを、さう書かず、又萬葉假名的な宛字を用ひたりして、本式の漢文とは甚だ違ふ書き方となつた。例へば、右大臣藤原實資の日記に、

宮自今曉重惱給之由告來。……巳刻以後宜御座。(長保元年十一月十二日條) (宮今曉より重く惱み給ふ由告げ來る。……巳の刻以後、宜しくおはします)

と見えるやうな、慣用的語法や特殊の表現が著しくなつて、言はば日本式の漢文或は和臭を帯びた漢文であつたけれども、とにかく漢字ばかりで書くといふことが、本來の日記の體裁である、といふやうに考へられてゐた。このやうな書き方は、上古の金石文などの中にも既に見られるところで、漢字の入つて來た當初からあつた、甚だ古い書き方と思はれる。

かういふ日記の性質を打破して、假名をもつて和文の日記を書くやうにしたのは、紀貫之の功績と言つてよい。即ちこの貫之の時にいたつて、日本的な自覺が起り、いたづらに漢字のみで文章を書くべきではなく、和文に依つても十分に國民的な思想又は精神を、思ふ儘に書き表すことが出來るといふ目的を明かにして、假名の日記を書くやうになつたのである。

このやうにして日記文學といふものが起つて來た。

平安時代の日記文學としては、土佐日記、蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、讃岐典侍日記などが、主なものとして擧げられる。又その日記の中には、旅行の文を含むものもあるので、日記紀行と連ねて言はれ、兩者の性質を一つにして取り扱ふことになつてゐる。獨り日記文學ばかりでなく、物語でもさうであるが、古い時代の物語の文章は、漢文的なところ

ろがあつて、まだ十分に和文の特色が發揮せられてゐない。例へば、かぐや姫の云はく「何でふさる事かし侍らん」と云へば（竹取物語）といふやうに、何々曰く、何々と云へり、と上下相應して表現する書き方で、文章の區切りも短く、又上下相應した表現を採るといふのは、漢文式な書き方である。即ち漢字で漢文まがひの文章を書くことを捨てて、假名で和文的に書き始めたけれども、始めはまだ十分に和文的な特色を發揮するにいたらず、漢文で書きつけた癖が遺つてゐるので、漢文口調であつたと思はれる。それが次第に洗練せられて、優美な、典雅な物語の文章へと發展して行つた。

土佐日記などかなり漢文まがひの文章のところがあつて、例へば天候のことを「てけ」とか「ていけ」とか言つてゐるが、これは天氣の字音である。さういふ言葉が用ひてあつたりして、語句や文章の上に漢文の影響が多い。併し、さういふところから出發して、次第に立派な和文の文章へと發達して行つたのである。

土佐日記は、土佐から都に歸るまでの旅行中の日記であつて、文章は素朴であるけれども、貫之が土佐で失つた幼子のことを悲しみ、又海賊が追つかけて來ることを恐れる、といふやう

な心持が中心となつて、素朴ながらも、内容は相當に感情の深い作品となつてゐる。

併しこの土佐日記以外の平安時代の日記は、すべて女性の作であり、又土佐日記も、作者の貫之が、一番始めに、「男もすなる日記と云ふ物を、女もして見むとてするなり」と書いてゐるやうに、自分を女にして書いたものである。即ち假名で書く日記は、女性の手に出たといふ觀念が終始つき纏うてゐて、男子は日記や書翰を漢文で書くことを主としてゐたから、男子は假名の日記などを書くものではないといふ考へが行はれ、日記文學といふ特殊の藝術作品を、女性が書き表すことにもなつたのである。

平安時代の日記文學の傑作は、何と言つても蜻蛉日記と更級日記であり、特に蜻蛉日記は最も長篇であると共に、又情緒的性質において、最も勝れた作品になつてゐると言つてよい。藤原道長の父である藤原兼家が、この蜻蛉日記の作者の愛人であつて、二人の間には右大將道綱といふ子供まで出來てゐる。その權勢者の兼家が、この蜻蛉日記の著者の外に、權勢のある妻を迎へ、又その他にもいかげしい噂が様々に傳へられるのを聞いて、心を惱ませ、兼家のつれなさを怨みながらも、子供の故に兼家から離れることが出來ずして、二十年の歲月を兼家に

捧げ、又子供の爲めに種々心を碎くのであるが、遂にその子供が若くして殿上人となり、父のお蔭で出世をするのを見て、母としての非常な喜びに打たれる。その母親としての愛情が、綿たる筆致をもつて、讀者の胸に迫るやうに書かれてゐる。物語が假作の小説とするならば、日記文學には、その作者の心情があまりの儘に表れてゐて、その偽らざる事實の前に、讀者を心から感動させる強い感銘の情が深く籠められてゐるのである。

更級日記の著者は、蜻蛉日記の著者の姪に當る人であつて、その叔母、姪の間柄にある二人が、最も勝れた日記文學の作者であることは、非常に興味が深い。更級日記は、少女時代に關東から都に歸るまでの長い旅路を経験し、都に歸つてからも、文學少女らしい文藝の世界に憧れながらも、その身は平凡な市井の一少女として、はかなく年を加へて行く。その夢多き少女の時代から、現實の生活の中に次第に目ざめて行く作者の心境が、これもしつとりした筆つきで書き表されてゐる。

ただ更級日記には、蜻蛉日記に見るやうな情熱が乏しい。蜻蛉日記は自己を顧みることが深いとともに、一面において激しい感情の持主であつたらしく、その感情の爆發する時には、相當思ひ切つた行動に出ることもある。さういふ強烈な心の動きの中から、蜻蛉日記の文學的深みが、おのづからにたたへられて來たものであつて、更級日記の著者のやうに、おとなしく、靜かに夢を描いてゐるといふやうなものとは、又違つた趣きがある。

これらは文藝的に日本婦人の感情を表現した日記であつて、さういふ意味では勝れた文藝作品であるが、更に全般的に言へば、日記文學には、紫式部日記のやうに、皇子の御誕生を壽ぎ奉る氣持で、喜びに溢れた宮中の内外の御模様を描寫し奉り、そこに當時の宮廷の風俗や、人情に觸れて、自らに宮廷生活の中心を濃く彩つてゐる感情の豊さが見える作品であるとか、或は讃岐典侍日記のやうに、天皇の崩御遊ばされる前後の御病床の御模様を精細に記し奉つて、その間に作者が御病氣の御平癒を祈つて悲しむ氣持や、又宮廷一般の御不例に對し奉り、悲歎にくれながらも衷心より御平癒を祈り奉る憂慮の念を記すとともに、御病氣中の、主上の御模様をも、一喜一憂の中にお見とり申し上げてゐる作者の姿、心情までも親はれるやうな作品などもあつて、これらは直接尊き御方の御消息に觸れて、容易に知り得べからざる九重の雲深きところの御様子、僅かに雲の間から、漸くその御光を仰ぎ奉るやうな感じのする作品である。

和泉式部は當時女流歌人の第一人者として、紫式部などからも、賞めたたへられた歌人である。ただ生活が奔放であつた爲めに、多くの誤解を招いたけれども、併し、その生活態度といふものも、實は和泉式部の浮薄な心境から出たのではなくして、むしろ和泉式部があまりに人を信じ、あまりに人に愛情を捧げ過ぎて、疑ひを知らぬ純真な氣持から、自然に人の誤解を受けるやうな態度にまで入り込んでしまつたのである。

和泉式部の歌は、當代の歌人の中でも最も傑出してゐて、紫式部の歌なども、到底和泉式部には及ばない。又歌人としては有名である赤染右衛門の如きも、實は常識的な歌を多く詠んでゐるに過ぎないのである。赤染右衛門といふ人は、かなり凡庸な性格の人のやうに思はれて、歌は一應纏まつてゐるが、情熱が燃え立つてゐないので、感動の深さが少い。そこに行くと和泉式部の歌は、全く情熱の高潮から詠み出だされて、心の動きが止むに止まれずして歌に表れた、といふやうな作品が多いのである。尤も和泉式部の多くの歌の中には、かなり理智的な歌や、言葉の言ひ懸けや、洒落を交へた、滑稽がかつた作もあるのであつて、必ずしもそのすべてが勝れてゐるといふわけでは勿論ないが、併しその歌の中には、他の平凡な歌人達に較べて、

砂金の如くきらきらと底に光るものがあることは確かである。

以上のやうな純然たる日記文學の外に、個人々々の家集であつても、文章が長くて、詞書の中に自己の經歷を書き現してゐるから、一種の自叙傳的な日記文學の體裁を持つものと言つてもよい書がある。例へば伊勢集とか、賀茂保憲女集とか、成尋阿闍梨母集とかいふのがそれである。就中成尋阿闍梨母集は、支那の五臺山に參じて、佛法の信仰を固くしようといふ目的で種々苦心して、支那へ渡る便船を求め、遂に支那に渡海した成尋阿闍梨の、支那に行く以前から、老後に及んで母が子と生別しなければならぬ悲みを敘べ、渡唐する子の無事を祈り、更に成尋阿闍梨が支那に行く爲めに都を去つた後の、母の淋しい胸中や、盡きせぬ想ひ出を、多くの歌を交へて筆にしたもので、ひたすらに子を思ふ愛情が全篇に満ち溢れてゐる。子の阿闍梨も亦歌を詠んでゐるのであるが、特に阿闍梨の母の歌の中には、その子を思ふ眞心の溢れた勝れた作が見られる。

藤田東湖が、この成尋阿闍梨の母の歌を褒めて、次のやうに言つてゐる。

僧成尋が入唐し侍りけるに、その母が、

から國もあめが下にぞありときくてる日の本をわすれざらん

と詠みしは、その情深く、その言葉たくみなるのみならず、上下内外の差別さへ正しくいひなしたること、女ながらもますらをに恥ぢざるべし。かの安倍仲麻呂などが、から國にゆきて、その風になびきつゝ、照る日の本を忘れて、李隆基の臣となりしたぐひは、かたちこそをのこならめ、心はをうなにもはるかに劣れるぞいまはしき。

と言つて、

あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山に出でし月かも

の歌を支那で詠じた安倍仲麻呂と、この成尋阿闍梨の母とを對照して、仲麻呂が彼の地において外國の臣下となつたことを彈劾し、この母の心を稱揚してゐるのである。尤も成尋阿闍梨の母は、老齡になつてわが子に離れなければならなかつたのであるから、その渡唐を喜んでゐるわけでは決してない。むしろ出来るだけこれを止めさせようとしたのであるが、成尋阿闍梨の決心が非常に固いので、遂にその希望の儘に渡唐させた。

このやうなところにも、現代のごとく近い支那に赴くのは事情が違つて、眞に萬里の波濤

を越えて行くのであるから、永遠の別れにも等しい。その生別が、死別となる悲しみをも忘れて、或は法の爲めに、或はわが國の文化の上に、貢獻をなすべく、かの國へ志を立てて渡つて行つた有志の者も、その數が必ずしも少くはない。

中世になると、女流の日記としては、建春門院中納言日記、これは藤原俊成の女で、定家の姉に當る人の日記であるが、この書であるとか、十六夜日記であるとか、又紀行文としては、海道記、東關紀行などが現れ、更に建禮門院右京大夫集の如きも、平家の滅亡に關して、平家の公達と別れた、宮廷の女性の物思ひに沈んだ悲しみの情がしみじみと溢れてゐて、やはり一種の日記文學の内容を持つ作品となつてゐる。

就中、十六夜日記は阿佛尼の著で、阿佛尼は藤原爲家の後妻であり、冷泉爲相の母であつたが、その所領が、爲相の異母兄である二條爲氏の爲めに横領せられたので、鎌倉幕府に訴へる爲めに、都を出て鎌倉に下つた。その間の旅行記が十六夜日記である。この中にもわが子の事を思ふ綿々たる情が流れてゐるが、特に阿佛尼は、わが子の教育には非常に心をひそめた人で、上の二人の兄は母が違ひ、而も既に大きくなつてゐるけれども、自分の生んだ子供はまだ幼い

のであるから、その子供の教育の爲めには甚だ心を砕いたのであつて、夜の鶴といふやうな庭訓の書をも著してゐる。

このやうに母の違ふところからして、冷泉爲相の流と、二條爲氏の流とが岐れたが、二條爲氏の弟の京極爲兼は、却て異母弟である冷泉流に加擔して、意見の新舊の對立が明瞭になるとなつたのである。併しながら、この新しい傾向の京極の方は持明院統に結び、二條家の方はむしろ大覺寺統の保護を頂いた。従つて大覺寺統を受けて居られる吉野の朝廷は、二條家流の歌風であらせられ、京都の方は却て京極系統の歌風を探られる傾向があつた。尤も二條家そのものは、後には京都に在つて、京都方の撰集に従つてゐるのである。併しこの京都方の撰集においては、吉野の朝廷の忠臣の作を、一つも載せてゐない。これを遺憾として、吉野の朝廷におかせられては、宗良親王によつて別に新葉集が編纂せられることとなつた。

それで、京極、冷泉の流を引く新しい系統は、室町時代にいたつて勢力はなくなつてしまつたけれどもその流を汲む新派の歌人で、二條家を非難攻撃した今川了俊は京都方の武士であり、俗名を今川貞世と云うて、吉野の朝廷と戦つたのである。九州に行つてから菊池氏と激戦をし

て、遂に官軍の菊池軍の爲めに敗走してゐる。晩年には、足利三代將軍の義滿の爲めに疑ひを蒙り、遂に出家隱遁して、歌のみを悠々と楽しむやうになつた。このやうなところにも、この新しい傾向の歌が、むしろ京都方に親近性を有してゐることが察せられるのであつて、歌の新舊の差別と言ふよりも、大義名分の志から、この問題を考へなければ、眞實の道の精神は明らかになつて來ないのである。

以上のやうに、新舊の端を開いたのは、爲家の子どもの時であるが、その一方は阿佛尼の生んだ爲相に依つて開かれてゐるのであるから、さういふ意味においても、この十六夜日記や、又歌人の阿佛尼の存在といふものは、なかなか意味の深いものである。

以上に述べて來た日記とともに、日記隨筆と並べ言はれる、自己の主觀的な感想を盛つた特殊の文學が現れた。普通三大隨筆と言はれて、枕草子、方丈記、徒然草の三種が擧げられる。中古においては、一條天皇時代に、枕草子が清少納言に依つて書かれ、鎌倉時代の始めには、方丈記を鴨長明が記し、吉野時代にいたつて兼好法師が徒然草を著した。特に、枕草子は隨筆

文學の祖と言へるが、この書名によつて、隨筆に當る文學の形態を一に草子とも言つてゐる。これらも亦、日記と同様に、漢語から出た文學の種目の名稱である。

この中、方丈記は、枕草子や徒然草と違つて、自己の感懷を述べて、その時代の天變地異や、或は人生の無常を感じさせるやうな様々の出來事、社會的事件を書き、それに依つて世を捨てて出家隱遁し、日野山に方丈の庵室を營んで、悠悠自適の生活に籠るまでの心境を描いたところは、一種の日記文學とも考へられるのであつて、隨筆といふ名稱は必ずしも當つてゐないのであるが、古くからこれを隨筆文學の中に入れてゐる。

枕草子は、宮中にお仕へした女房として、時の中宮定子に、一意専心奉仕する、清少納言の勝ち氣で清熱的ではあるが、併し理智を失はない精神が、全篇に溢れてゐる。

枕草子は獨特の文學形式をもつて創作されたもので、かういふ種類の文學は、從來出てゐない。枕草子以後には、その影響の下に徒然草なども作られたし、その他、尤の草子などの模倣作品も出で、又松平定信の花月草紙のごときも、枕草子に倣つたものであるが、清少納言自身は、その機智と才能からして、世界にも類の少い特殊の文學を生んだのである。

これを唐の李義山の雜纂といふ書の影響であるとする説もある。雜纂は、枕草子の一部に見られる、ものはづくしの形で書いたものであるから、形式上稍々類似の點があるけれども、併し枕草子は決して李義山の雜纂に依つて書かれた作品ではなく、雜纂が機智に富んでゐて、内容に妥當性を思はせるところが多分にあるとしても、心の奥行に深みがない。又文學的な含みのない事柄の羅列に終つてゐる感があるのに對して、枕草子のもものはづくしの方は、多方面の事項に互つてをり、且又、種々の固有名詞なども擧げてゐる點は、雜纂と全く性質の違ふところである。このやうなものはづくしの部分と、宮廷生活の種々相を描いた小話の部分とがあつて、その兩者の混在してゐるのが、むしろ枕草子の特色であると言つてよい。

清少納言が非常に支那の故事に通じてゐたといふことは、有名な白樂天の「香爐峯の雪は簾を掲げて見る」の詩に依つて、中宮の仰せを受けると直ちに簾を掲げたといふ逸話に依つても明らかであり、或は支那の于公（枕草子では于公の子の于定國の話としてゐる）が、將來出世をした時に、自分の家の門が小さくては車が入らないので、門を大きくするといふことを考へて、門だけを大きく作つたのを、村人は嘲笑したが、後果して于公は非常な出世をするやうにな

つた、といふ有名な故事を引いて、中宮大進の生昌に一矢を酬いたやうな逸話にも表れてゐる。その外、枕草子の中でも名高い物語である、翁丸といふ犬が、主上の御勘氣を受けて、人々に危く殺されさうであつたのを、清少納言が同情して、翁丸を保護してやつた話には、動物を描いて人間的な感情に溢れてゐる名筆を見るべきである。

その奇警な觀察としては、例へば、

憎きもの。急ぐ事ある折に、長言する客人。侮り易き人ならば、後にとても遣りつべけれども、さすがに心恥かしき人、いと憎し。硯に髪の入りにて、磨られたる。又墨の中に石籠りて、きしくと軋みたる。

などといふ事柄を見ると、今日でも深く同感の情を表することの出来るものばかりである。その清少納言が、主上の御前に出たときには、ただ恐れ入つて、墨をすれと仰せられても、手は墨を夢中ですり動かすだけで、目は呆然として彼方を仰ぎ畏つてゐる、その清少納言の姿の中には、主上、中宮をこの上もなく尊び、崇め奉つて、一身をひたすらにお任せ申し上げるやうな純情が流れてゐるのである。

民間に居つた時には、宮廷の生活がどんなにか尊く、有難いことであらうと想像して、正月七日の白馬の節會の時に、人々と戸口まで参つて、遙か宮廷の中で行はれる儀式を望み見て、何といふ運のよい人が、九重の中を、このやうに立ち馴らして歩いてゐるのであらうかと、羨ましく思ひやられたことであつた。そのやうな清少納言の筆致からも、やはり今日と同様に、平安時代においても、九重の雲深き宮廷に對し奉る尊敬とあこがれの氣持は、並々ならぬ國民感情を表現するものであつた、と考へられるところがあるのである。

作品を読むと、殆どすべて宮廷の内部で書いたものであるからして、如何にも宮廷に對して親しみ深く物馴れた感情が動いてゐるやうであるが、併し、それは表面的な心であつて、實際には宮廷に對し奉る國民としての感情は、やはりいつの時代でも同様であつて、上古も現在も變らず、平安時代においても深く神聖視し奉つてゐたのである。

徒然草は吉野時代の兼好法師の作であり、兼好法師は京都の神道家として、最も權威のあつた吉田神社の社家の出である。しかも、兼好の兄釋慈遍のごときは、吉野の朝廷の御爲めに力を盡くし、又精神的にも神道をもつて、吉野の朝廷に御援助申し上げてゐる人物である。

このやうな位置にある愛好であるから、例へば徒然草の書き出しにしても、いでや此の世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位はいとも畏し。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞ止事無き。といふやうに、特に皇室の御事は、一般の國民と違つて尊ばなければならないことを區別して書いてゐるのである。

併し又一面において現状に満足しない氣持をば、

古の聖の御代の政をも忘れ、民の患、國の損はるるをも知らず、萬づに清らを盡くして甚じと思ひ、所狭き様したる人こそ、うたて思ふ所なく見ゆれ。衣冠より馬車に至るまで、有るに隨ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれとぞ、九條殿の遺誠にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、公の奉り物は、疎略なるをもて善しとすところを侍れ。

と言つて、華美を盡くす上流の人々に對し、不満の意を表したやうなところにも、この作者の志を見るこゝが出来来る。徒然草は、單に隱遁者の文學として存在するばかりではなく、その志を行はんとして、社會に對し、歴史に對して、その思ふところを表現して忘憚なく所信を披

瀝した作品であつて、枕草子に較べると、思想の深さと感情の強さは、一段と大きくなつてゐる。ただ、吉野時代の騷亂に關して、殆ど直接に觸れることがなく、何らの意見も主張も見られないのは遺憾と言はなければならない。

枕草子には、女子がその學問を街つて見せるといふ、小さな主觀の交つてゐることを否定出來ないが、徒然草になると、もつと大きな自然觀照の眼が開けて來て、むしろ社會的な視野のもとに、その心が高く強く表されてゐるのである。それ故に、徒然草は、比較的新しい作品であるに拘らず、人生修養の道として、江戸時代には多くの註釋書が出で、平明な解釋書も現れて、江戸時代の民衆生活の中に、非常に深くしみ込んで行つた。それは全く徒然草の、人生に對する態度なり考へ方なりが、確實な教養の上に基礎を置いてゐたからである。

又その中には、例へば藝能修業の道を通じて、人生の問題に觸れてゐる、萬づの道の人、假令不堪なりと雖も、堪能の非家の人に並ぶ時、必ず勝ることは、撓みなく慎しみて、輕々しくせぬと、ひとへに自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方の振舞、心遣も、愚にして謹しめるは得の本なり。巧にして縦なるは、失の

本なり。

といふやうな一條の中にも、その道に携はる人は、たとへ下手であつても、その道に携はらない上手の人に較べると、むしろその下手だと思はれた方に勝る點が見出されるのは、つまりその道において、弛みなく勵む人と、器用に委せて、軽々しく自由に行なつてゐる人との相違が、自然に現れるものである、といふやうに、文人と素人との差違を明かにして、藝道の機微を説いてゐる中に、人生修養の眞理がにじみ出てゐるやうなところにも、この書の修養書としての意味が見出される。かういふ性質を持つてゐる書であるからして、徒然草は單なる隨筆の書としてばかりではなく、深い教養を與へるものとして、江戸時代にも普ねく行はれ、又今日においても國民的な普及力を持つてゐて、廣く親しまれる所以である。

近古に出た一條兼良の東齋隨筆は、隨筆といふ書名を持つ著の始であるが、近世になつては、隨筆が澤山現れた中でも、學問上の考證や、道の精神を交へ記して、隨筆の價値を發揮した本居宣長の玉勝間のごときが、隨筆書として第一に居り、又、優雅な文章で處世的教訓を内に寓した松平樂翁の花月草紙は、むしろ徒然草の亞流を追うて、しかも一新機軸を出したものであ

る。これらが隨筆の方面の代表書と言はれるであらう。

日記文學の一體と言つてもよい、自敘傳的な文學として、新井白石の折焚柴の記が名高い。併し、私はそれよりもむしろ、藤田東湖が藩主水戸烈公の業績を記した常陸帶をとる。いづれも漢文に長じた學者が、國文の筆致をもつて書いた平明な文章の中に、その衷情を披瀝したものである點は共通してゐる。殊に常陸帶にいたつては、藩主に對する熱烈な敬愛の情と眞實の心が、おのづからに溢れ出てゐて、讀者を感ぜしめることが深い。さすがに、國家の大事に志を傾けた東湖の精神の籠つた文章である。

かしこくも 榑原の天皇あらぶる敵を平げ給ひ、神武の御威徳もて天が下しろしめされしよりこの方、皇朝の威稜、世に類ひなく、磯城島宮の御代には任那國より貢をさゝげ、豊浦宮の御代には韓國まで打平げ給ひ、皇子には豊城入彦命、日本武尊ましまし、將軍には坂上田村麻呂、阿部比羅夫などいへる人々ありて、四方の隅々まで靡かぬ草木もなく、まつろはぬ夷狄のなかりしが、弘安の年に至りて忽必烈といへるもの、蒙古より起りて漢土を奪ひぬる勢につのりて、おほけなくも、神國を攻めんと計りしを、鎌倉の執權北條時宗が計らひにて、

蒙古より捧げし使の首を刎ね、まさしく忽必烈を敵になしぬるさまを世に示し、防禦の備忘るまじきよし觸れぬれば、天下の人々すはや蒙古寄せ來らんと待ち設け、又かしこくも時の帝石清水の神に祈り給ひ、御身もて、神國の禍に代り給はむとまで誓をかけ給ふぞ有り難き。上も下もかくの如くなりければ、其誠天地を動かし、神の御心にも叶ひけん、蒙古攻め來りし時に、科戸（たか）の風はげしく吹き出して、荒浪を起し、十萬人の賊船も人も海の藻屑となりはて、僅に三人ならでは本國にえ歸らざりしは、實に心地よき事なりき。其後、豊臣氏軍を出して朝鮮に渡り、彼の王城に攻め入り、王子まで擒にし、其威稜、明國までも恐れ怖（おそ）き、二百年餘の今日まで、朝鮮の貢絶ゆる事なく、まつろひぬるぞゆゑしき。

このやうに、わが國威を海外に輝かした歴史を敘して來るなかに、東湖の皇國精神がおのづからに覺られるのであるが、このやうな心を盛るに簡潔で平明な文章を以つてした本書のごときは、すぐれた史傳の書といふべきである。史論の書といふには、あまりに一人の事に即き過ぎる。故に日記隨筆の中に附して、東湖の文學的位置を、正氣歌や回天詩史のごとき漢文の作を他にして、ここに明かにしておきたいと思ふのである。

六、史 論

歴史は文學として重要であるばかりでなく、一つの歴史觀を持つ評論が、一面において重要な文學的位置を占める。わが國の評論の中では、この史論の流れが著しい文學の分野に位してゐるのである。この流れは、例へば明治以後にも、山路愛山とか、福本日南とか、徳富蘇峰とかいふやうな人々を出したのであるが、かういつた史論の水上を辿れば、慈鎮の作といふ愚管抄にまで溯ることが出来る。それに次いで吉野時代に有名な北畠親房の神皇正統記が出た。

更に、歴史上の事實を記した史書よりも、道としての歴史の精神を記した物語などの方に、歴史的眞實性があるとしてゐる源氏物語螢の巻の議論なども注意すべきである。

神代より世にある事を記し置きけるななり。日本紀などはたゞ片そばぞかし。これら（物語）にこそ道々しく委しき事はあらめ。

と言つてゐる議論は、物語よりも史論の上にあてて考へるとき、最も妥當性を持つて來るのである。

愚管抄は、武家が勢力を占めて、朝權を蔑ろにする傾向が著しくなつて來たので、宮廷の權威を確立しなければならぬといふ、切迫した危機の感から書かれたものであつて、その中心思想は、飽くまでもわが國體の本質を明らかにすることにあつた。従つて、その愚管抄の中には、

日本國ノナラヒハ國王種姓ノ人ナラヌスチヲ國王ニハスマジト神ノ代ヨリ定メタル國也。

といふやうな、國體に立脚した思潮が著しいのであつて、かういふ見地から、歴史が記してある。

神皇正統記にいたつては、吉野時代の急迫した情勢のもとに、皇政復古の理想に燃え給ふ後醍醐天皇の大御心を翼賛し奉る意味で書き著された書であつて、そこには先づ冒頭に有名な、

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。わが國のみ此の事あり、異朝にはその類なし。此の故に神國といふなり。

といふ宣言が發せられてゐる。かういふ根本的な歴史觀に立つて、滿腔の情熱をこめ、雄渾な史觀を述べたものがこの書である。従つて 後村上天皇に關し奉り、

今の帝、又、天照大神より以來の正統を受けましましぬれば、此の御光に争ひ奉る者やばあるべき。なかなかかくて、靜まるべき時の運とぞ覺え侍る。

と言つてゐるやうに、大御稜威の輝き給ふ希望と確信に燃えて、この書を書いたことが明らかにせられてゐるのである。

北畠親房が吉野時代に朝敵を征伐する爲め、遙か東國にあつて、苦戦籠城をして、敵と戦ひつづこの書を書いたといふ事實は、一層この書の價値を高める所以である。陣中匆忙の際であるから、殆ど参考書とてもなく、極く簡単な年表を座右に置いて、多くは語記に依りこの書を書き記したといふことは、驚くべきその記憶力を證するものであるが、更に陣中にあつて、この書を書かすには居られなかつた親房のその情熱が、一層この書の内容を價値づけるのである。劍を以て朝敵と戦ひつづ、筆を以て國體の本質を明らかにし、皇國の歴史觀からして、朝敵の存在すべきでない所以を述べることに依つて、思想的にも朝敵を倒さうとしたものであつ

て、親房は剣と筆と兩方面から逆賊に向つてゐるのである。かういふ文武の兩道に達してゐる親房が、老齡であるに拘らず、敵を倒さずんば止まざる熱意を以て、陣中匆忙の間に、尙又筆を以て敵に對しようとした烈々たる氣魄と旺盛な意力とは、大いに心の打たれるものがある。史論は、この精神力があつて始めて人を動かす眞實性を持つのである。それは決して合理と論理に隸屬する冷靜な理論の奴隸なのではない。

史論の書は愚管抄に始まり、神皇正統記にいたつて極まつたと言つてよい。江戸時代には水戸學の方で大日本史を編纂し、これに安積澹泊が論贊を書いたが、その影響の下に、頼山陽の日本外史が編まれ、一々の事件や人物に就いてその史觀を述べてゐる。更に又新井白石の讀史餘論が、その獨特の立場から歴史を評論してゐるのである。

これらの史論を通じて、例へば楠正成に對する態度のごときは、共通したものがあつたのであつて、新井白石は、足利高氏を以て叛臣と斷じ、朝敵と言つて、

功臣に於テハ正成ヲ以テ第一トス。

と論じてゐるのである。又頼山陽も日本外史では、

その勤皇の功は、余楠氏を以て第一と爲す。

と言ひ、

餘烈の及ぶ所、獨りその子孫のみならず、公卿にまれ、將士にまれ、各々弓箭を執りて、以て王事に勤むるは、概ね皆楠氏の風を聞きて起る者なり。嗚呼楠氏の如きは、眞に武臣の名に愧ぢずと謂ふべし。

と、稱揚の言を盡くし、水戸の徳川光圀が、田圃の中に殆ど參る者とはなかつた楠正成の墓を修復して、その區域を擴め、「嗚呼忠臣楠氏之墓」の石碑を建てて、朱舜水がその碑文を書いて、世の注目を引くにいたつたことは、偉大なる業績であるが、このやうな楠氏敬仰の信念が、爾後の史論に志す者の胸中を一様に支配して、そこに國體的歴史觀が流れてゐるのである。安積澹泊の大日本史贊藪には、

其の忠義の心、天地を窮め、萬古に互り、而して滅ぶべからず。身死すと雖も、其の死せざるものは、固より自若たり。正行遺託を受け、能く義旗を建て、始終一節、死を以て國に報ゆ。忠孝兩全と謂ふべし。宗黨疏屬に至るまで、皆能く力戰して節に死す、閩門忠義

の鬼となる。豈に正成の教導訓練の効にあらざらんや。

といふやうに、大楠公、小楠公父子の忠節をたたへてゐるのは、水戸學の精神を發揮した論評である。このやうに正成に對して、江戸時代の史論が、等しく賞讃の辭を惜しまなかつたのは、そこに國體精神に立脚する歴史觀が、當時の史家の心を支配してゐたからである。この精神がやがて維新の原動力に發展して行つたのである。かくて、眞木保臣の楠子論や吉田松陰の七生説が出た。

江戸時代の史論で一種の風格があるのは、上田秋成の著である。上田秋成は本居宣長に反對をして、古事記を主とする宣長の意見に服さなかつたのであるが、併しその史論においては、やはり國學の見地からして、獨特の文藝精神に依る意見を出してゐる。かくて蘇我馬子のごときも、その大逆に就いて徹底的にこれを筆誅してゐるのであつて、秋成は上代の歴史に關し、忌憚なき議論を試みてゐる。

さういふ秋成であるからして、楠正成に就いても、

ほまれある名をば仰ぎておほかたは君が心を知らぬなりけり

と正成を讃嘆しつつも、その眞意を世俗の人物がさとらぬ遺憾の情を詠んだ歌三首を作つてゐるのである。併しその中には秋成一流の時勢に對する批判的觀念が流れてゐる。

かういふ史論の流れが、明治になつては、日露戦争の風雲を前にして、岡倉天心の清熱を驅り立てて、東洋の理想といふやうな書物を書かしたものである。東洋の理想は、東洋の文化を、統一的な力あるものにして、西洋文化の攻勢に對抗すべきである、といふ理想をもつて書かれたものであつて、そこには、文化において、東洋は一體となつて居つたといふ見地から、わが國の美術史が採り上げられてゐる。即ち、わが國の美術史を見ると、佛教の思想と藝術の流れ、儒教の思想と藝術の流れ、老莊の思想と藝術の流れ、さういふ宗教文化が渾一してわが國の美術史を形造つてゐるといふ解釋のもとに、東洋統一の理想の實現はわが國においてのみ見ることが出来るのであるといふ、歴史の事實を明らかにしたものであつて、そこには東洋復興の理想に燃える情熱が力強くみなぎつてゐる。かくて、これ又史論の書と言ふべきである。

この書の冒頭には、有名な「アジアは一つなり」といふ宣言がある。これは「大日本は神國なり」といふ宣言と共に、更に雄大廣汎な視野に立つて、その強固な信念を披瀝したものであ

つて、このアジアが一つであるといふ確信が、やがてその史論の根本的な世界觀を形造るのである。さうして、かういふ根本からして、その史論には雄渾莊重な詩的情熱と、眞理を追究して正邪順逆を明かにしようとする良心と、わが國の使命に忠ならんとする主張が、滿ち溢れて、これらの史論を一層價值高きものとしてゐる。

このやうにして、わが國の史論に流れてゐる傳統は、常に高いところにおいて、わが國體を敬仰するといふ大本に立脚するものである。この點が常にすぐれた史論を書く史家の、情熱の據り所となつてゐる、といふことを知らなければならぬ。

七、連歌・俳諧

一首の和歌を、上の句と下の句と別々の人が作るといふ連歌は、萬葉集にも見られ、平安時代を通じて行はれて居つた。かういふ一首の歌の上下句を別個の人が作るといふだけでなく、上の句に下の句をつけ、その下の句に上の句をつけ、更にその上の句に對して下の句をおくといふやうにして、五句、十句と長く句數を連ねて行く。これを上句、下句だけで一首を形成する短い連歌に對して長連歌と言ふのであるが、後にはこの長連歌が普通となつて、短い連歌は殆ど作られなくなつた。

連歌といふものは、大體は滑稽な傾向を主として、即興的に作られたものであるが、後には眞面目な、優美で、且幽玄な風格の連歌も發達して來た。この滑稽な連歌を俳諧の連歌と言ひ、眞面目な連歌と對立して行はれてゐた。さうして、眞面目な連歌を作る人々のことを柿の本兼

と言ひ、滑稽な俳諧の連歌を作る人々を栗の本衆などと言つてゐたのが、鎌倉時代の初頃の連歌界の状況であつた。

その後、俳諧の連歌は作られなくなつて、眞面目な連歌のみが行はれ、吉野時代にいたつて、二條良基、僧救濟といふ人が主となつて、初めて連歌の勅撰集である、菟玖波集が編纂せられたのである。連歌の歴史は、この菟玖波集に始まると言つてよい。

室町時代には、心敬、宗祇、柴屋軒宗長、牡丹花肖柏、里村紹巴、その他の人々が出て、連歌は大に行はれた。殊に多人數が集つて、連歌を行ふといふことの中に、精神の流通があり、全體の人々が一致協力して、融合親和の感を得るといふところに、統一感を盛る連歌の眞髓があるであつて、これは武家精神に適ふものとして、武家の間に大に行はれたのである。且又、前の句に對して次の句を作る際に、直感的觀想の閃きを得るといふやうな點において、禪宗などと共通する端的な悟道直入の味はひを持つてゐたからして、武家の無心無想の中に一道の光明を認めるといつたやうな境地から、連歌の作をも導き出さうとするやうになり、一層武家は連歌を喜んだのである。或は出陣するに當つて、神社の前で法樂の連歌を行つたり、陣中

においても、連歌師を招いては、戰塵の傍ら連歌の集まりを催しては清興の餘裕を楽しんだりした。そのやうにして、武家の生活と連歌といふものは、密接であつて、切り離すことの出来ない精神の流通がそこにあつた。それは武家が禪宗の信仰を重んじたのと同様の心持が流れてゐたのである。このやうに、連歌の精神には、武家的な本質が一面において働いてゐた眞相を見逃すことは出来ない。豊臣秀吉のごときも亦連歌を好んでゐたのである。

ところが、このやうにして、眞面目な連歌が行はれてゐる傍らに、又々滑稽な連歌が擡頭して來て、次第に眞面目な連歌と勢力を争ふやうになり、更に又一般的に滑稽な連歌の方が喜ばれるやうにもなつた。それが即ち俳諧の連歌である。

俳諧は滑稽といふ意味の語で、俳諧の連歌といふのを、後には略稱して、ただ俳諧と稱するやうになつた。俳諧は山崎宗鑑、荒木田守武といふやうな人々に依つて、室町時代の末頃から行はれ、江戸時代に入つてはその系統を引くところの松永貞徳（これを貞門とか古風とか稱する）又、松永貞徳の門に出て、更に一派の旗幟を立て、談林派といふ流派を作つた西山宗因などに依つて受け繼がれて行つた。

松永貞徳の滑稽は、言葉の洒落に絶つたものが多かつたが、西山宗因にいたつては、範圍が自由になり、その滑稽も市井生活の様々の方面から材料を得て來るといふわけで、内容上の滑稽を持つやうになつた。何れにしても、近世の初頭においては、俳諧が滑稽の本質を備へて行はれてゐたといふことは共通してゐる。さうして眞面目な連歌の方は、近世に入つては、殆どその勢力を失墜して、ただ幕府の連歌師である里村家を中心として、一部に行はれてゐるに過ぎないやうな状況にあつた。

ところがこのやうに俳諧の連歌が滑稽な性質を持つて行はれてゐる時に、この俳諧の理念に根本的な改革を與へたものが松尾芭蕉である。ここにおいて俳諧は單に滑稽を主とするものではなくして、心情の奥底から流露した、眞實の藝術に上昇するにいたつたのである。本當の俳句の歴史は、芭蕉に始まると言つてよい。かやうにして俳句は、芭蕉以後、蕪村、一茶及び明治の正岡子規の四人に依つて、その歴史が形造られてゐる、と言つても差支へないほどに、この四人の高峰が著しい俳句の歴史的な内容を築き上げてゐるのである。

芭蕉の句は幽玄、深奥で、象徴的な傾向がある。自然の形象と、自己の心境とが映發する境に、おのづからその作が生まれ出て來る。

白菊や目に立てて見る塵もなし

といふ自然の句の中に、清らかな女性の姿が暗示されてゐる。更に又、

菊の香や奈良には古き佛達

といふ句において、菊の香と、奈良といふ古都の佛像との間に、一つの共通した情趣を見出して、これを象徴的に表現したものが右の句となつてゐる。

かういふ芭蕉の最も高い藝術精神に依つて、俳句は一躍してその位置を向上し、國民詩としての著しい存在を示すやうになつた。

芭蕉は奥の細道の大旅行を始め、しばしば旅行をして、その最期も關西の旅行中においてであつた。奥の細道の旅行中のこと、飯塚の温泉に泊つてゐる時に、病氣に罹つて、持病の癩が起つたが、更に氣分の悪いのを我慢して、桑折の驛に出た。併しながら、

遙かなる行く末をかゝえてかゝる病、覺束なしといへど羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縱横に踏んで伊達の大木戸を越す。

といふ、實に雄々しい心持で旅を續けて行く。人生の無常は元より覺悟であつて、道路で死ねばそれも天命であると諦める。のみならずむしろそこに自己の運命を托して前途程遠き旅行の道にしつかりとした足どりで歩を運んでゆくのである。このやうな力強い態度は、弱い身體を持つてゐる芭蕉の精神力を語るものと言はなければならぬ。

大體旅行を多くして、自然に親しんだ人々には、萬葉時代の山部赤人があり、降つて西行があり、宗祇があり、而して芭蕉が擧げられる。山部赤人が東國の方に旅行して、途中で富士山を詠んだりしてゐるのは、公用に依つて旅立つたものと思はれる。西行の旅行の中には、東大寺の勸進といふやうな用向きもあり、且又白峰の陵を訪れたりして、そこには單なる煙霞の癖といふ以外の強い心の欲求があつた。宗祇も亦旅行を續けたのは、當時の武家が對峙してゐる中を、處々方々に招かれて出掛けたのであつて、これも單なる旅行の趣味といふばかりではなく、やはりそれぞれの用向きを持つものであつた。併し芭蕉にいたつては、何の用事もなく、唯旅に憧れて旅行をしたといふことは、奥の細道の初めにも、

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上にも生涯を浮かべ、馬の口とらえ

て老を向ふる者は日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず。

と言つてゐるやうに、そゞろ神、或は道祖神といふ漂泊の神々が、自分に取りついたやうな氣持がするほどに、旅行に憧れてゐるのである。

併し、結果から見ると、芭蕉の旅行も決して單なる煙霞の癖ではなくして、その旅に依つて詩心を養ふといふばかりでなく、地方の人々の間には、眞の日本的な藝術の本質が自覺されないうで、極めて低い句作に耽り、乃至はさういふ藝術的な刺戟を持つものもないといふ狀況であつたところに、芭蕉のごとく熱烈な俳句の信念を懐く俳人が來たので、これを迎へた地方の人は、芭蕉を中心にして句作に耽り、或はその批評を聞いた爲めに、藝術の眞の意味が明かに分り、地方に所謂蕉風の俳句を擧めて、その間に藝術の楽しみといふものを浸潤させて行つた、その効果は著しいものがある。

芭蕉の必ずしも長くはない地方行脚の間において、非常な影響を及ぼすやうになつたのは、その晩年を絶えず地方の旅行に費して、蕉風の句作の振興に努力したからであつて、このことが芭蕉の旅行をして、非常に有意義なものとしてゐるのである。

このやうに旅行に憧れ、自然を友とした歌人、俳人たちが、決して單なる遊覽旅行をして過して居つたのではなく、そこにはそれぞれの意味があつて旅行に出で立つてゐたのである。これは歌人、俳人ばかりではなくして、高山彦九郎のごとき勤皇家も全國を遊歴したが、その行く先では必ず同志を訪れ、或は志士や一藝一道に勝れた人々を訪問しては、それらの人々から種々の話を聞くことに依つて、自己の精神を修養し、且又、見聞を擴める資としてゐるのである。吉田松陰のごときも全國を廻つたが、これは邊境を見て歩くことに依つて、わが國の海防に關して實地踏査を試み、國防の上に正しい判斷を考へようとしての旅行であつた。元より伊能忠敬の如きが、測量の爲めに旅行したのは、その目的がはつきりしてゐる。

かういふ人々とは違つて、單に煙霞の癖からして旅行した人々もあつて、大淀三千風といふ俳人は、日本行脚文集などといふ大きな紀行書を著はしてゐるが、併し、そのやうに單に旅行

を楽しむといふだけのことでは、何の意味を持つものでもないからして、人々にも大きい感動を與へず、又文學の歴史の上でも、大した影響を遺さなかつたのである。

以上のやうに自然を友として、偉大なる業績を示した人々の旅行は、右のやうな單なる旅行とは全く違つて、本質的な意味を持つものであるといふことを知らなければならぬ。

芭蕉はこのやうにして、偉大なる足跡を遺したのであるが、芭蕉以後の俳句は、殆ど次第に墮落して行く歴史だと言つてよい。芭蕉の次の蕪村は、芭蕉に較べると一段下つてゐる。その次の一茶は、蕪村に較べると、これも蕪村より更に一段下つてゐる。蕪村はむしろ畫人として偉大なる人物であつて、俳句作家としては芭蕉より遙かに劣る。ただその平安時代の宮廷趣味を俳句に生かし、或は又妖怪趣味を俳句にとらへたりした作品や、更に客觀的、描寫的句風の中には、印象の鮮明な、見るべきものも元より少くないのであるが、芭蕉のやうに、對象と自己の心境が、渾然と融和して一體となつた句境には、到底いたつてゐないのであつて、芭蕉のごとき渾然たる大藝術家に較べると、蕪村の俳句は一段落ちるのである。

一茶にいたつては、その心境が非常にひねくれて居つて、到底芭蕉は勿論、蕪村とも同日に

は論ずることが出来ないものである。その人間的な生活や心境の中には、同情すべきものがあるとしても、わが國の大きい文學の歴史的生命から見るときには、一茶のごときは到底卑俗な存在たるを免れない。

一茶と言へば、上田秋成が想ひ出される。上田秋成一茶は、どこことなく共通した性格や境遇にあるもののやうな氣がする。上田秋成のごときも亦一茶と同様に、稍々世を白眼視するひねくれた心があつて、それが一面においては、さういふ境地から獨特の藝術を作り出す要素ともなつてゐるのであるが、しかも亦、そのために、秋成の作品には一種の卑俗な感じを伴つてゐることは免れがたいのである。

上田秋成は常に本居宣長に反對し、又論争したこともあつて、同じ眞淵門下の系統に屬するこの二人は、相反する意見を持つて居つた。併しながら歴史の流れから見れば、本居宣長は正しく日本の國家を照らす大義の上に立つてゐるのであつて、秋成の立場は宣長に較べれば皮相なる歴史的觀察を持つものに過ぎないのである。この秋成や又一茶の價値が、明治時代にいたつて認められるやうになつたといふところに、明治時代の性格といふものが現れてゐるやうである。

ある。

正岡千規に依つて、當時の低俗な俳句が再び傳統の光に照らし出されて、正しい見地から検討されることになり、千規は最初に蕪村を研究したが、更に遡つて芭蕉に及び、遂にこの芭蕉の心境を理想とするところまで到達した。それは千規が和歌の復興において、萬葉集を理想としたのと同じ態度である。千規のさういふ復古的な考へ方は、正しい藝術の維新を目ざしてゐるものの正當な目標であつて、千規が芭蕉の正風に俳句の基準を求めたといふことは、俳句が復活する基因を作る上に有力な原動力となつた。

併し何れにしても、俳句は庶民藝術であつて、和歌の宮廷藝術とは、自ら性格の異なるものがある。元來、宮廷藝術なる連歌から分れて出たものであるが、俳句は平民文學として獨特の性質を發達させた。殊に和歌は抒情性といふことが主であつて、主情的性質を持つものであるが、俳句は自己の心境をその儘表現するといふのではなく、一應自己の心境を突き離して、客觀的な立場に置き、對象との間に或距離をおいて見る、といふやうな感じがする。

さういふやうに、俳句が主情的な性格を缺いてゐて、寧ろ客觀的傾向が濃厚であるといふこ

とは、一つには俳句が短い詩型であるといふ、形式上の制約もあつてのことと思はれて、十分に自己の心境を表現するといふよりは、むしろ客觀世界を、言語表現を極めて儉約した方法で句作する、といふやうになつたものだと思はれる。

それから俳句には五、七、五といふ形式の規則の外に、切字の規則や、季語の規則が生じて、何々や、といふやうな切字の表現に依つて、くどくどしい説明を省略することが出来、俳句の短い形式に順應して、特殊の表現を形成するやうになつた。併しながらその爲めに俳句の表現がどこことなく形式上のよそよそしさを持つて來て、そこに和歌の主情的な性格とは違ふ、俳句獨特の客觀的な性格を形造る原因が含まれてゐる。

さうして、俳句には季語を入れるといふことに依つて、季節の觀念を深める。これはわが國の藝術が、四季の變化の多い自然界の現象に順應する爲めであつて、上古の時代から季を重んじるといふ心持は、種々見えてゐるところである。例へば、春と秋と何れがよいかといふ優劣論は、古事記の秋山あきやま之下氷壯夫しもつとと春山はるやま之霞壯夫はるがすけとの物語の中にも見えて居つて、ここでは春山之霞壯夫が勝つのであるからして、春の方が尊ばれてゐる。このやうな春と秋との論は、萬葉

集の額田王の、春の山の花と、秋の山の紅葉との優劣の歌ともなつて現れ、ここでは秋の方が好まれてゐるのである。

それから平安時代を通じても、春と秋との優劣は歌などにも、屢々見えるが、古くは明朗で陽氣な春が勝ち、後には、むしろ哀愁の情に富む秋が好まれるやうになつたといふのも、注意すべき國民感情の變遷である。又萬葉集には既に春夏秋冬に區別するといふ方法が現れて、これが勅撰集を通じて和歌の分類の標準となつてゐる。さうしてその各々の四季の中に歌はれる風物といふものも、大體一定して來て、花鳥風月趣味が起り、所謂季語の源は和歌の方にも現れてゐるのであるが、これを俳句においては、一層規則的に嚴重に守り、季をやかましく言ふやうになつた。それは俳句が短い詩型であるから、季節のことを詳しく説明してゐたりしては、言葉が長くなつて、俳句として意をつくすのに十分ではないので、さういふ説明を全く省き、季語を入れることに依つて、端的にその季語の背景となる季節の感情をたたへようとしたのである。

このやうにして、俳句では季語といふものが甚だ重要となつたのであるが、併しこの季語を必ず入れなければならぬといふことの爲めに、俳句の客觀的自然界に沈湎しなければならぬ

いといふ性質が、一層濃厚になつて行つたのであつて、俳句が主情的性質を持ち得なくなつたといふ理由は、このやうなところにもあるのである。

このやうにして、宮廷の藝術としてみやびの情趣に満ちてゐる和歌には、抒情的性質が濃厚であり、俳句にいたつては、むしろ客観的な自然に對する觀念を著しい特色として來たのである。

俳人といふ一種の性格を持つものが、情熱的であるよりも、むしろ世を諦觀した脱俗風の文人的性格に生きてゐる傾向が多いといふのは、やはり俳句の性格と共通するものがあるのであつて、さういふところにも俳句の特色が見られる。併し俳句も亦獨特の日本的藝術であり、國民詩の一つとして、和歌と異なる傾向、特色を持つものであるからして、むしろその存在意義が一層明かに認められるわけである。ただ和歌の宮廷的性格に對して、俳句の平民的性格といふことは、俳句の歴史的價値をば、一應決定的なものとしてをる、といふことを考へなければならぬ。俳句がみやびの藝術に上昇することの出來ない理由は、そこにあるのであつて、芭蕉の天才をもつてしても、俳句は常に國家の大義に殉ずるといふやうな、わが國藝術の正道に出来るものとはならなかつた。併しながら維新の志士などにも、俳句で辭世を詠んだり、或はその志

士としての境地を俳句で表現したのもあるのである。

例へば櫻田門事件の大關和七郎は、

なんぞその思ひ残さん春の雪

と吟じ、大和天忠組の一人、森下儀之介には、

咲きかけて散るや老木の歸り花

の句がある。又、水戸の藤田小四郎の一味の頭首であつた、山國兵部には、

いざさらば冥土の鬼とひと軍

の句がある。長州藩で、蛤御門の變の結果、死んだ人々の一人、竹内正兵衛には、

もののふの露と消えゆく枯野かな

又、對馬藩でも内訌があつて、姦黨のため、正義派が多く殺された。その正義派の一人、堀

江真介は、

むらぎもの清きを霜に見る夜かな

と吟じてゐる。これらいづれも辭世の句である。此の度の大東亞戦争のハワイ眞珠灣攻撃に

參加した特別攻撃隊の九軍神にも、和歌とともに、俳句の辭世が一句見えてゐるが、以上を通覽するに、俳句も亦、國民感情を表現するに足る國民詩の一體とすることは出来るであらう。

俳諧はやはり長連歌と同様の規則があつて、五、七、五に七、七の句をつけ、七、七に五、七、五をつけるといふやうに、長く鎖のやうに續けて行つて、花の定座とか、月の定座とか、花や月を入れる位置がきまつてゐるといふ規則などがあつたが、やがてその長い俳諧の中でも、特に第一句、即ち發句は、一番長上の者が詠む最も重要な句とされてをり、従つてこの發句だけを特別のものとして鑑賞するといふことが行はれて、發句を獨立させるやうにもなつた。

この發句だけを獨立して詠み味はふといふことは、宗祇あたりから著しくなつて來て、俳諧の連歌が勃興した後にも、やはりこの發句を特に獨立して鑑賞するといふことは、盛んに行はれてをり、かくして發句だけが切り離されて、所謂俳句と稱される五、七、五の詩型を持つ藝術が完成するやうになつた。併しそれは明治時代以後のことであつて、それ以前は、發句だけを全然切り離して別のものにするといふことは殆ど全く見られないのである。近世を通じて、發句を作るならば、必ずその後には附句があつて、以下長い俳諧が作られて行く、といふのが

句作の上の約束であつた。併しそれでも味はふ時には、この發句だけを獨立して鑑賞することも行はれてゐるのである。

この發句だけが獨立して、その後を長く作り續けるといふことが行はれなくなつたのは、明治時代になつてからで、即ち正岡子規が俳諧の革新を唱道して、新派の俳句が起つた後には、この長く作り續ける俳諧の連歌の如きものを、藝術的ではないとして排斥した。それが爲めに遂に俳諧の連歌は絶えて、發句だけが全く獨立せられ、獨特の藝術となるやうになつたのである。従つてこれは、近い時代になつてから、更に俳句の觀念が變つたものと言ふべきである。

ただ正岡子規が西洋的藝術論の立場からして、多人數で作るところの連歌を藝術的な意味がないとして排斥したのは、わが國獨特の藝術の行き方といふものを無視した議論であつて、連歌といふものは、決してそのやうに個性の特色の發揮といふことだけを主眼とする、西洋的文藝の立場から論じられるべき性質のものではなく、むしろ個性を滅却して、集まつてゐる人々の一人々々が協同一致した雰圍氣の中から、ある融和した感情を以て連歌を作り出すといふ、その全體的な行き方の中に、わが國風の獨特な藝術が認められなければならない。しかもその中

にはおのづから個性の表現も認められるのであつて、必ずしも全く個性を減し去つたものではなく、個性を生かしつつ全體として美しく調和した雰圍氣を尊ぶのである。一人の個性に依つて、全體の調和が亂されて、連歌の統一した藝術的雰圍氣を破壊されるといふことは、拙い作品として非常に忌まれたのであつて、多數の句が並んでゐる、その初めから終りまでの間に、一貫した雰圍氣が流れて居つて、さうした統一性を持ちつつ、しかも個々の人々の個性や一卷の發展を思ふ心が働いて變化してゆく、その統一と變化の間に、全體としては渾然とした藝術世界が作り出されてゐるといふ特色に、連歌の作品の價値を人々は認めてゐたのである。この點にわが國獨特の藝術的な考へ方があるといふことを知つておく必要がある。

八、戲曲

手の舞ひ、足の踏むところを知らずといふが、感激の極には、人間の肉體の運動が、自然に一つのリズムを帯びた舞踊になつて來る。さうして舞ひは手のあやであり、踊りは足の踏み方を言ふのである。

彼の神代の昔において 天照大神が天の岩戸に御籠りあそばした時に、岩戸前で天鈿女命が神懸りをして舞踊を行つた。それが即ちわが國の舞踊の源である。又その時に、その舞踊は様々の滑稽な動作をしたので、神々はゑらぎ笑ひ給うた。このやうにして、舞踊は又猿樂と自然に關聯を持つて來る。猿樂は支那の散樂（宮廷の雅樂に對して民間の雜樂を言ふ）の語から出て、天鈿女命の後裔猿女君の樂の意味になつたもので、このやうな猿樂の舞踊といふものが、人々の心を勵まし、楽しませて、日常生活を活氣づける源となつてゐるのである。優美な平安

時代にあつても、神樂などで行はれる猿樂には、随分露骨な、又極めて活潑な猿樂を行つたものであつて、必ずしも優美、典雅な藝術に終始してゐたわけではない。このやうな猿樂の戯れが、現代でも、農村の神事舞踊であるとか、或は神樂のやうなものの中に遺つてゐるが、これらの歌舞からしてわが國の演劇が自然に發達して來たのである。

猿樂の原始的要素を遺しながら、これを藝術化して、立派な演劇に仕上げたのは、室町時代の觀世派の祖、觀阿彌、世阿彌親子の功績で、就中世阿彌は偉大なる藝術家と言はなければならぬ。世阿彌は今までの猿樂を革新して、これに幽玄、深遠な趣きをたたへ、且又和歌の理論からして、優美、典雅な情緒をも添へ、而も音楽と舞踊と文學との一致した藝術の世界を、新しく創造したのである。その歌詞も世阿彌が作り、又自らこれを作曲して、自分で作中の人物に扮し、舞臺に登場した。しかも別に世阿彌には、その猿樂の歌詞の作り方や、作曲法の心得を書いた論文であるとか、或は猿樂の藝能を練達するのに必要な心得であるとか、その方法とかいふやうなものを綿密に分類し、發達の段階を詳述して、後進の者に注意を與へたのであるが、それは今日から見ると非常に深い藝術論となつてゐるのである。このやうにして世阿彌

は作家であると同時に評論家を兼ね、又音楽家でもあり、勝れた舞臺藝術家でもあるといふわけで、實にあらゆる藝術の要素を頭腦に消化してゐた一大天才であつて、かういふ大藝術家は外國に求めてもさう多くはない。或ひはワグナーの如きがこれに當るかも知れないが、ワグナーは自ら舞臺には立たなかつた。

この猿樂を現在では普通能樂と言つてゐる。能樂は世阿彌が室町時代に創り出してより、現代にいたるまで、長い年月が経つてをるけれども、その根底の要素は、全く世阿彌が創造したまゝを傳へてゐるのであつて、その間に殆ど原理的な變化はないと言つてよい。即ち能樂の演出様式といふものは、世阿彌の時に確立せられたまゝが現代に残されてゐるのである。しかもその舞臺装置といひ、或は音楽の表現様式といひ、極めて象徴的な中に、あらゆる變化を藏してゐて、複雑巧緻な性質を持つのである。單に寫實の形式で表現するといふのではなくして、舞臺の上に或る幽玄、象徴の世界を現出するといふのが、能樂の行き方である。しかも一面において、現實社會の寫實的方面としては、能狂言があつて、この狂言においては、當時の社會の現實的な人物が登場して來て、様々の滑稽を演じるのである。この象徴的性質を持つ幽玄の

能樂と、寫實的性質を持つ滑稽の要素の能狂言とが、入り交つて演出せられるところに、能樂そのものの複雑性といふものが含まれてゐる。それが一方では優れた藝術的效果を持つものとなつてゐる。このやうにして能樂は、狂言が介入することに依つて、一層その複雑性と、藝術的様式の巧妙な効果とを發揮するやうになつたのである。

昔ながらの猿樂の滑稽といふものは、むしろ能狂言の方に傳へられてゐるのであつて、能樂そのものは、飽くまでも深刻な、眞面目な、悲劇性を持つものである。さうして、その中でも「翁」といふ曲が、最も古い猿樂の原始様式を示すものと思はれる。

それで能狂言は現代物であるけれども、猿樂には時代劇が多いのであつて、その中に若干の現代劇が入つてゐる。それらの現代劇は何れも悲劇であつて、例へば、「隅田川」のやうに、わが子が人買ひに攫はれて、母親が狂人となり、そのわが子の後を追つてさまよひ歩いてゐる中に、わが子がかなく路傍の露と消えてゐるのに行き遭つて、土地の人からそのことを教へられるといふやうな内容のものなど、何れも哀れの深い趣きを湛へてゐる。併し、能樂の多くは時代劇であつて、上代、平安時代、源平時代のことなどがそこに取り扱はれてゐる。或は又

神々の出現する能樂が多く、これを神能と言ふ。

この神能が多いといふことに依つて、能樂の中の敬神的要素を指摘することも出来るが、更に能樂の尊皇精神を發揮したものととしては、例へば「國栖」の如きがある。これは吉野の國栖が、大海人皇子の吉野に忍び給ふのを御助け申し上げる、といふ内容のものである。或は又「白樂天」の如きは、支那の白樂天がわが國にやつて來るのを、住吉の明神が、和歌の威徳で追ひ還されるといふ筋のもので、わが國の智慧を試さうとした白樂天が、

手風神風に、吹きもどされて、唐船は、ここより、漢土に歸りけり。實に有難や、神と君といふ、最後はわが國をほめたたへる文句で終つてゐるのである。

又能樂には、曾我兄弟の復讐事件を取り扱つたものが種々あつて、「切兼曾我」「元服曾我」「小袖曾我」その外の多くの作品を見る。

かういふ武士道的な復讐精神は、「望月」といふ曲となつても現れてゐて、これは信濃の住人、安田庄司友治といふものが、同國の望月秋長といふものに討たれたので、その子の花若が、

年頃となつて、敵を尋ねるうち、宿屋で目ざす敵に廻り合はせ、敵の前で旅藝人が謡ひを歌ふといふ様子を装つて、一晚曾我兄弟の敵討ちの場面を歌つて聞かせるが、それとともに、花若が踊を踊り、遂に相手の隙間を狙つて敵を仕止める、といふ筋である。つまり曾我兄弟の復讐精神が、ここでは望月といふ現代劇の中で生かされてゐるわけである。この精神は、なほ江戸時代の文學や演劇にも續いてゐる。

更に又太平記の楠正成、正行のことも能樂に取り扱はれてゐて、「櫻井」といふ曲は、櫻井の驛の親子別れの段を能樂にしたもの、その内容は大體太平記と同様である。その中に、

父が子なればさすがにも、忠義の道は兼て知れ。討ちもられし郎等を、憐み扶持しかくれ家の、よし野の川の水清き、流れ絶えせぬ菊水の、旗を二度靡かせて、敵を千里に退けて、叡慮を安め奉れ。實に弓取の家の名を、惜しむばかりながらへて、同じ此の世にあるならば、君の御運も高御倉。天津日嗣の動きなく、めでたき御代に逢ふべきを、今のうき身ぞ悲しき。

と、我が子を戒め勵まして、父の死後に忠勤を盡すやうに言ひ遺してゐるのである。

かういふ能樂の作品の中に見える武士的精神と、しかもそれが皇室の御事に結びつく態度とが、やがて能樂を一貫する道義的性質を形造つてゐるのである。かやうにして、その内容と、幽玄、莊重な歌詞、及び音楽に依る表現は、緊密な結合を完成して、謡曲の價値を大ならしめるのである。この謡曲が、やがて様々の影響を與へて、江戸時代の歌舞伎劇に流れ込んで來る。

謡曲の外に、幸若舞があつて、これも武士の間に喜ばれた音曲であり、その墮落したものは舞々と言つて地方を廻り、幸若舞を歌ひ、舞ひ、地方民を慰める門附の藝能ともなつてゐた。その中には、やはり曾我兄弟に關するものと、それに義經の一生を描いた作品が多く、就中、高館で最期を遂げた義經の悲壯な物語は、十分に武士的勇氣を鼓舞するに足るものであつた。

幸若舞の中には、「日本記」といふ曲があつて、日本書紀により、天地開闢の歴史を述べ、「さしもに廣き天竺國、月をかたどる國なれば月氏國とは申すなり。唐土廣しと申せども、震旦國と名づけつつ、星をかたどる國にてあり。日本わが朝は、小國なりとは申せども、日域と名づけつつ、日をかたどれる國にて、三國一のわが朝に、心のまゝの壽命にて、長く榮ゆる目出た

さよ」と壽いだ。わが國こそ支那印度にまさる三國一の國であると自任してゐるのである。かくて、わが國の事物をもつて三國一といふ語も當時は行はれてゐて、義經記に「三國一の剛の者」とか、能狂言の花子に「唐土天竺わが朝三國一ちやよの」とか見えるが、この時代には又、天下一、日本一などといふ語が流行つて來て、勇壯剛快な氣持も、一般には漲つてゐたのである。とにかく、わが國をもつて字内に冠たる意識に到達する氣宇の雄大さが、この當時の文藝に現れてゐる事實を見のがしてはならない。

これらが室町時代に行はれてゐるが、琉球から蛇皮線といふ樂器が、堺を経てわが國に入り、これが三味線に變化して、淨瑠璃物語といふ作品と結びつき、節づけせられて、ここに淨瑠璃節が起つた。この淨瑠璃節は、昔からあつた人形使ひの操り人形を伴ふにいたつて、人形劇が出来上つたのである。かやうにして淨瑠璃節は、人形劇に依つて舞臺に演出せられ、様々の劇的表現を、如實に觀客に見せることが出来るやうになつた。

人形劇は始めは人形の裾から手を差し込んで、一人の人が使つたものであるが、すつと遅れて、胴を使ふ人が主となるが、その外に左手を使ふ人と、足を使ふ人と、助手が二人ついて、

三人の者が一個の人形に取りかかる、わが國獨特の三人使ひの人形劇が發達した。最初は足も何もなかつたのであるが、後には足がつくやうになり、又、眼が動いたり、眉が動いたり、口が動いたり、指が動いたりする精巧な描寫が可能となり、人間の表情に近い活動が出来るやうに工夫せられたので、自然一人の人では使ふことが困難となつて、三人で使ふやうになつた。これが即ち今日文樂などで見られる人形劇である。

このやうに三人の人が一體となつて活動して、人形を働かせ、しかもその人形が何等不自然なところがなく、極めて自然な人間的動作を表現して、三人の人形使ひが一個の人形に取りかかつてゐるに拘らず、その使ひ手の人間は殆ど觀客の眼につかないで、人形の動作だけが觀客の眼の中に入つて來るといふのは、わが國の人形が如何に巧みな發達を遂げて、成功の域に到達してゐるか、といふことを明かに示すものである。

併しこのやうな演出を見るやうになつたのはよほど後のことであつて、やはり長い間原始的な一人使ひの人形が行はれてゐた。近松門左衛門の時代の人形劇もやはりさうである。この人形劇を伴ふ淨瑠璃節は、始めは金平淨瑠璃といふもので、大いに勢力が伸びて、時代の好尚

に迎へられることとなつた。

金平淨瑠璃といふのは、坂田金時の子の坂田金平といふ英雄が主人公であつて、この金平が極めて豪勇無双であるから、あらゆる悪人、悪魔、怪物を退治して、非常な豪勇振りを發揮するのである。金平淨瑠璃には、澤山の作品があるけれども、内容は皆類似してゐて、豪勇無双の金平が、縦横無盡に活躍するといふ、壯快極まる空想的な内容である。この大活劇が當時の人々に喝采をせられたのであつて、長い戦亂が續いた後、太平の時代を迎へても、やはりまだこの金平節によつて代表せられるやうな、殺伐な氣風が一般に行はれてをり、かういふ傾向の娛樂が喜ばれたのである。

然るにこのやうな原始的古淨瑠璃を改めて、これに高い藝術的價値を與へたものが實に近松門左衛門であつた。譬へて言へば、能樂における世阿彌の位置にあるものと言つても差支へがない。近松門左衛門は、音樂の方面では、從來の古淨瑠璃の外に、平曲や、謡曲や、幸若や、あらゆる要素を採り入れて、今までの古淨瑠璃のやうに原始的な性質のものではなく、もつと進歩した渾然たる藝術を完成させたが、内容的にも一大飛躍を遂げて、極めて自然な表現を持

ち、しかも觀客を飽きさせないだけの巧妙な舞臺効果を狙ふ作品を作つたのである。

近松の作品では、世話物と言つて、當時の世相や時代の風潮を取り扱つたものが喜ばれたのであるが、併し又一方においては、時代劇の中にも勝れたものが多い。「國性爺合戦」の如きは、その代表作と言ふべき作品で、和唐内が父の老一官を助けて支那に渡り、父の祖國である明の復興の爲めに、韃靼王と戦つて勇猛を現す。その間に千里の藪で虎と戦つたり、韃靼兵を退けたり、様々の活躍をするが、又一方において韃靼を討伐する爲めに、腹違ひの姉である錦祥女が嫁いでゐる甘輝將軍を、自分の味方に引き入れようとして非常な苦心をする。それで和唐内の母親が、甘輝將軍のところに入質となつて行つて、甘輝將軍を信頼させ味方につけようとするのである。併しこのことを和唐内は非常に悲しんで、どうしても甘輝が味方をしないならば、甘輝と一戦を交へようとするが、和唐内の母親は、甘輝の妻が自分の繼娘に當るといふところから、この繼娘に對する義理を重んじて、飽くまでも和唐内を押し止め、支那の者から、日本の繼母は無慈悲であるといふやうな悪名を取つてはならぬと力説して、

普ねく國々に日本人は邪慳なりと、國の名を引き出だすは我が日本の恥ぞかし。唐を照ら

す日影も日本を照らす日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常情あり、慈悲専らの神國に生を受けた此の母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られうか。と言ひ、錦祥女が夫と和唐内との間に板挿みとなつて、夫に忠實を盡くすか、或は弟や父親に信義を盡くすか、その進退に窮した結果、自ら死なうとするのを、母親が止めるといふ悲劇が展開せられるが、このやうなところにも、淨瑠璃が義理と人情を重んじて、大義の爲めには身命を擲つても構はぬといふ、日本的道義性を強調する要素の、次第に發達して來る跡を見ることが出来るのである。

この傾向が更に發達して、家來が主人の爲めに、自分の子供を身代りにするといふやうな、所謂身代り劇の悲劇が展開される。例へば敵が味方を攻め滅ぼしたといふやうな時、味方の大將の子供は、忠臣に依つて匿まはれてゐる。併し敵はその子供までも殺さうとして行く方を嚴重に搜索する。忠臣は様々に苦勞を嘗めてこれを隠しておくのであるが、遂に敵の魔手がその身邊に迫つて來るに及び、これが若様の首である、と言つて、實は自分の子供を犠牲に供する。即ち、自分の子供の首を若様の身代りとして敵に差し出して、一時敵の目を晦まし、それに依

つて敵が安心してゐる隙に、若様を連れて落ちのびる、さうして味方の再興を計る、といつたやうな悲劇的構想は、淨瑠璃の中に屢々出て來るところである。

「菅原傳授手習鑑」の「寺小屋の段」などもその代表的な場面であつて、菅公の子供である菅秀才を大逆の志を抱く藤原時平の魔手から救はうとして、かつて菅公の御恩を受けた武部源藏が非常に苦心をしてゐるが、遂に、菅秀才の首を討てといふ嚴命を受ける。菅公の家來の梅王と時平の家來の松王とは兄弟であるが、互ひに敵味方に分れてゐるので仲がよくない。然るにこの松王が、武部源藏の匿まつてゐる菅秀才の首實檢に來るのである。

ところが松王は自分の子供の小太郎を、身分を隠して武部源藏の寺小屋にやる。子供には豫め因果を含め、覺悟させた上で、寺小屋に入門させたのである。武部源藏は菅秀才を殺すことは出來ず、如何にして敵の眼を晦まさうかと苦心してゐる時に、「いづれを見ても山家育ち」の子供ばかりの中に、身分のよささうな新入りのこの子供に氣がついて、遂に松王の子供の小太郎を殺して身代りとする。

さて敵の家來である松王が菅秀才の首實檢に來て、その首を見るといふと、わが子の首であ

るが、それはもとより覺悟をしてゐたことであるから、悲しみをこらへて、これこそは菅秀才の首である、と斷言し、遂に菅秀才がこの世になきものとなつたといふので、時平の一味の者は安心するといふ筋で、實は敵方の家來であるから、全く味方に不利を計るであらうと思はれてゐた松王が、實はわが子を犠牲に供することによつて、菅公への義理を立てようといふのである。この松王が菅秀才の首を見て本物と言ふか偽物と言ふかと、武部源藏やその妻など、並びに松王に付き添うてゐる赤面（悪人をいふ）の春藤玄番が、それぞれの心持で緊張する箇所がこの場面のヤマである。かういふ道義的性質の發揮せられてゐるものが、淨瑠璃には多い。身代りなどといふことは、殆ど他國人には解しがたいわが國特有の倫理觀念であらう。

就中「假名手本忠臣藏」は、淨瑠璃並びに歌舞伎の代表的名作となつてゐる。赤穂義士の復讐事件が劇に作られたものは非常に多いのであつて、近松門左衛門が、既にこの事件が起つて間もなく、その作品に採り入れてゐる「碁盤太平記」を始め、幾十となく淨瑠璃や歌舞伎に上演されてゐるのであるが、遂に「假名手本忠臣藏」に依つて、義士劇は大成され、これを代表することになつた。

この忠臣藏に表れてゐる武士道、犠牲的精神といふものは、觀客をして非常に感動を深からしめ、作中の義士の苦衷をよく理解することに依つて、その道義的精神を昂揚させるのに大いに役立つてゐる。忠臣藏がわが國の淨瑠璃の代表作であるのみならず、よく國民劇としての目的を果すことが出来るといふのも、その複雑な構想の中に、一貫してゐるところの武士的な純粹の精神、いかなる困難にも堪へ忍んで、主君に一途に忠節を盡くさうとするその心が、觀衆を感激させて、人々を自然の感化に導くからで、これが、忠臣藏の價値を高からしめる所以である。

早野勘平は、義士の一味に加入したいといふ志を抱いて、いろいろ苦心をするが、勘平は不義をして、お家を逃亡したといふ理由で、それが許されない。それで義士の復讐に關する費用を調達することに依つて、せめて義士の活動を助け、一味に加へてもらつて故主に對する自分の不忠を報いたいと思ふ。その早野勘平の苦衷を知つた舅の與市兵衛は、勘平の妻、即ち自分の娘のおかるの身賣りさへ決行して、その代金をもつて勘平の志を達せしめようとする。

ところが悪人の斧定九郎の爲めに、山崎街道で與市兵衛は殺されて、その持つてゐた、娘の身賣りの代金五十兩が入つてゐる財布を奪はれるが、更に斧定九郎は、勘平が猪を撃つたとこ

る、誤つてその彈丸に當つて死亡する。そこにやつて來た勘平は、定九郎の懷の中に、與市兵衛から強奪した財布があるのを見て、天の興へと喜ぶが、やがてわが家へ歸つて來ると、與市兵衛の死骸が運ばれ、又自分の奪つた財布は與市兵衛の持つてゐた財布であるといふことがわかつたので、勘平は自分が殺したのは與市兵衛であると思ひ違ひをして、非常な苦惱の結果、遂に切腹して死ぬる。その最期の時になつて同志の義士が、與市兵衛の死體を改めたところ、その傷は刀疵であつて、鐵砲疵でないといふことが明かにせられたので、結局勘平の男の與市兵衛を殺したものは勘平ではない、とその疑ひが晴れ、却つて男の仇を打ち留めて復讐を遂げたことがわかる。そこで勘平は自分の濡れ衣が濯がれるとともに、又義士の人々から、勘平が今までの間に、それほど苦勞をして一味徒黨に入ること願つてゐた志を哀れまれ、加入を許されることになつたので、安んじて喜びながら死んで行くといふこの悲劇は、有名な忠臣蔵の五段目から六段目にかけての部分である。このやうなところにも、忠臣蔵が悲劇性に富むとともに、その内容には、死をもつて自己の責任を償ひ、その不始末のお詫びをしようとする責任感が現れてゐて、いかにも武士的な倫理性に徹した作品である。菅原傳授手習鑑も假名手本忠臣

蔵も、竹田出雲、三好松洛、並木千柳らの合作であるが、元祿時代以後では、これらの人々の出た享保から寶曆の間の三四十年が淨瑠璃の最も隆盛な時代であつた。さうして、この時期の作品の内容は、概ね以上の二三例のやうな、倫理觀念を根本においたものである。

淨瑠璃の中には、かなり情痴に墮したのも、勿論ないことはないけれども、併し常にその根本となつてゐるものは、このやうな責任感や犠牲的精神の發揮であり、又社會道徳を守らうとする道義觀念の發露、その義理を守らうとする心持が人間的感情、即ちやむにやまれぬ自然の人情と衝突して、自分の思ふこと、願つてゐるところを自由に果すことが出来ない惱みを、或は死によつて解決し、或は小我を捨てて大我に生きるといふ道に依つて解決しようとするのが、淨瑠璃の内容の中心である。即ち自由なる個人の名譽や利慾に墮さないで、國の大きな道徳の中に自己を生かさう、といふのが、淨瑠璃に共通した精神で、この正義感の流れてゐるところに淨瑠璃の價值を高からしめてゐる理由があるのである。

人形劇であるからして、その表現にはどうしても誇張があり、かなり空想的な性質が強くなつて來る。假にその動作を演出するにしても、死の場面などは非常に誇張して、人間の動作と

してはあまりに残酷だと思はれるやうな演出をしなければ、死の實感がなかなか出て來ない。それで淨瑠璃の文章の中には、非常に誇張の分子が多く、單なる寫實的表現では、十分に舞臺効果を擧げることが出來ないのである。

かういふ淨瑠璃の空想的浪漫性に對して、歌舞伎の方は人間が演じるのであるから、非常に寫實的要素が濃厚であり、歌舞伎劇は最初から淨瑠璃とは反對に、寫實的な性質をもつて行はれて來た。宗教的舞踊が變化したもので、念佛踊などを取り入れ、これに謡曲のごとき先行演劇の影響で、劇的效果を與へるやうに案出せられたものが出雲のお國のお國歌舞伎であるが、この男女入り混りの歌舞伎劇が禁止せられた結果、變じて若衆即ち少年ばかりの演じる若衆歌舞伎となり更に野郎歌舞伎となつたけれども、その寫實的な性質は少しも變らない。ただ女優の出演の禁止が、女形といふ獨特の變態的な俳優を存在せしめるにいたつたが、それにもかかはらず、歌舞伎の現實感は決して破られないのである。

殊に元祿時代にいたつて、近松門左衛門のごとき作家が、やはり歌舞伎の方の筆を執つたが、京都の名優の坂田藤十郎のごときは、寫實的な演技の名手であつたと言はれる。それに對して

江戸の方では、金平淨瑠璃の影響を多分に受けて、勇壯活潑な、かなり空想的な演出が喜ばれてゐたが、併しそれでも淨瑠璃に較べると、やはり寫實的要素が濃厚である。

歌舞伎は、始めは常に淨瑠璃の影響を受けて、淨瑠璃で當つたものを歌舞伎の方に採り入れて、歌舞伎で演出するといふ傾向があつたが、次第に歌舞伎劇が人氣を集めて來て、いつか淨瑠璃の方は飽かれ氣味になつた。生命のない人形に魂を入れた人形劇よりも、むしろ、人間を主體として演出される歌舞伎劇の現實感の方が、時人の好尚を吸収するやうになつて、歌舞伎と人形劇の位置は顛倒するにいたつたのである。

初めは歌舞伎劇の専門作者といふやうなものは殆どなくて、多くは市川團十郎、その他の俳優や、多少歌舞伎に興味を持つてゐるやうな者が、歌舞伎の臺本を作つた。臺詞の如きは、役者が相互に勝手に極めて、その場面場面で取りやりをしたのである。市川團十郎の劇作者としての筆名を三升屋兵庫と言ふ。

ところが後になつて、淨瑠璃が次第に勢力を失墜するやうになり、淨瑠璃作者が歌舞伎劇の方に轉向して、歌舞伎劇専門作家が出來た。並木正三がその最初の人であつた。それ以後、多

くの歌舞伎作者が出て、特に鶴屋南北と、河竹默阿彌が勝れた劇作者として擧げられる。

鶴屋南北は文化文政時代の人であり、河竹默阿彌にいたつては、明治以後にも活躍して、長く作品を發表してゐた人である。これらの歌舞伎劇は、寫實的要素が甚だ濃厚であることは、もとよりであるが、しかも亦歌舞伎劇は、元來宗教舞踊から發達して來たものであるから、舞踊的要素を遺してゐることも著しいのであつて、必ず歌舞伎の一場面には所作事といふ舞踊の部分が行はれる。又淨瑠璃の方においても、淨瑠璃節はもと平家物語を語つてゐた、平曲の盲目法師が始めたものであるからして、平家物語のやうな文學的要素が淨瑠璃節には長く遺つてゐて、淨瑠璃節の一部分には、道行とか揃物とかいふ優美、典雅な文章の部分が必ず差しはさまれ、この場面はやはり所作事として演出せられたのである。殊に、道行はいつまでも行はれてゐた。人形劇においても、歌舞伎劇においても、舞踊を一つの場面として挿入するといふことは同じであつて、即ちわが國の古典演劇においては、西洋の近代劇などで言はれるやうな、純粹の寫實は存在しないのであつて、寫實的であるとは言つても、やはり歌舞伎獨特の空想的な要素がある。併しそこがわが國の古典演劇の本質となつてゐるのであるからして、この浪漫的要素

を失ふといふと、わが國の演劇の特質は、甚だ稀薄なものとならざるを得ない。それで南北や默阿彌の作品にいたつては、歌舞伎劇の中でも最も寫實的ではあるが、しかも舞踊的要素であるとか、或は繪畫的場面を表現する構成とか、實際よりも美化せられた部分が甚だ多いのであつて、西洋の演劇で意味するやうな、さういふ寫實ではない。このやうに、現實の物に即した西洋的寫實ではなく、空想的夢幻的要素を多分に包蔵しつつ、現實を美化した寫實を行ふところに日本の寫實の意味があり、一面そこに、日本的な藝術の本質が流れてゐたと言つてよい。

ただ南北の作品には幽霊がよく取り扱はれ、默阿彌の作品では盜賊がしばしば題材となつてをり、怪談劇と言ひ、白浪劇と言つて、さういふものが喜ばれてゐるのは、當時の頽廢的世相を示すものに他ならない。それで一般に江戸時代の町人文化によつて廢された物質的、頽廢的性質といふものは、幕末になるほど社會を覆うて濃厚となつた。その世相が特に南北や默阿彌の劇には著しく反映して表現されてゐるのである。

默阿彌の白浪劇の中でも、「村井長庵巧破傘」といふ、大岡政談に取材した作品においては、

村井長庵といふ徹底的な悪人を描いて、そこには何等の道德的要素を見出すことが出来ない。それは併し又遙かに遠く元祿時代の近松門左衛門の淨瑠璃の中にも、見出される要素であつて、例へば近松門左衛門の作の「女殺油地獄」の主人公の與兵衛のごときは、やはり徹底した不良青年として描かれ、遊興の金に困つては、自分が平素世話になつてゐて、最も親しみが深く、恩を受けてゐる油屋の妻女をさへ殺して、その金錢を強奪することを辭さないやうな、全く良心に缺けてゐる人物として描かれてゐる。かういふ悪人を舞臺に登場させて、そこに殘虐な行爲を敢へて行はせるといふことは、江戸時代の演劇の、不自然な殘虐趣味を表すものと言はなければならぬ。さういふ興味のために、悪人を主題として、道義觀念をも忘れ去つたものである。尤も近松門左衛門の「女殺油地獄」のごときは、當時でもあまり好まれなかつた。それはあまりに陰惨な悲劇であつたからである。このやうな悲劇性の中に、町人生活の眞實を求めて、その價值を高く見ようといふのが、最近における一種の觀方であつたが、それは西洋的な文學觀から出た解釋に過ぎない。

このやうな歌舞伎劇の頽廢性といふものは、一面において文化文政時代乃至天保時代といふ當時の世相に基づくものには違ひない。従つて、近松門左衛門の作などにも、元祿時代の腐敗した世相を表すものが出て來たのである。併しながら、多少ともこれを美化することに努めてゐるのが默阿彌であつて、默阿彌の劇に登場する盜賊は大抵義賊の類である。それでなければ、遂に自己の悪事を醜然と悟つて、良心を取り戻し、當局に名乗つて出るとか、或は又因果應報の理に依つて、自らの破滅を來すとかいふやうな結末になるものが多い。そこに當時の勸善懲惡思想が表現せられてゐるのである。かやうにして、とにかく默阿彌においては、頽廢的な白浪狂言を演出しながら、そこに多少とも一種の倫理性を持たせて、何等かの意味において、人間的な心の美しさといふものを表現しようとした努力は認められるのである。ところが南北の作品には、さういふ倫理性が甚だ稀薄であつて、默阿彌に較べると一層頽廢的である。怪談狂言として代表的な「東海道四谷怪談」などは、その著しいものであつて、民谷伊右衛門が色慾に迷ひ、その妻お岩は遂に伊右衛門の手に懸かつて殺される。そこには、良心の働きといふものは殆ど見られない。その外もつと不倫な色慾などが盛んに出て來るのであつて、到底正視するに耐へないものがある。従つて南北の時代は、全く社會が頽廢のどん底に沈

んでゐたものと言つてよいが、黙阿彌にいたつては、幕末、維新時代の騒然たる中からして、明治の新しい政治の黎明がさし上つて來た時代に生きてゐたから、さういふ變動の時世に身をおいて、歌舞伎劇の作品に従つてゐた黙阿彌の心には、單なる頽廢以外に、新時代的な動搖といふやうなものが感じられて、それが頽廢と頽廢の底に働く良心といふやうなものの相刻の姿となつて、その劇の中にも現れるやうになつたのであらう。

何れにしても、黙阿彌は、江戸時代の古典演劇の最後の人と言つてよい作家である。その後明治となつては、福地櫻痴とか、更に岡本綺堂とかいふやうな新しい歌舞伎作者も現れたけれども、やはり明治以後には、近代寫實劇の要素が、次第に歌舞伎の中に著しく入つて來るやうになつて、江戸時代的な古典的歌舞伎劇の本質が可成り薄れたことは否定出來ない事實である。従つて、今日古典演劇の面影を持つてゐるものは、黙阿彌の作品を上演するやうな場合にのみ見られるにとどまる。

九、近世小説

小説といふ語は、支那の街談、巷説、乃至は稗史小説と言はれてゐるやうに、口傳への短い説話、傳唱の類と言つたものを意呼し、わが國でも、小説といふ語は、やはりさういふ意味でも使つてゐる。ところが一方において、この小説の語を、文字で書かれた創作の意味に用ひることも江戸時代からあつて、例へば風來山人の「風來六々部集」に收めてある「天狗儺體鑿定縁起」といふ書の序文に、

我が風來先生、戯に筆を採り、多くの小説世に行はれてより、近世開板の俗文、名をかすめ文意を賈せ、或は直に風來山人と記すもあり。

と言つてゐるが、この小説といふ言葉に「よみほん」と振假名をつけてゐるのである。この讀本といふ語は、文字通りに文字で書かれ、眼で讀む本の意味であつて、口傳への短い説話な

どとは性質が違ふものである。さうして江戸時代においては、讀本といふのは、一種の文學的創作品を稱する語である。

近世小説の流れには、繪を見る本と、文字で讀む本との、二つの大きな系統がある。この流れの源は、遙か平安時代にも遡るのであるが、その頃には文學と美術と二つの藝術の世界が極めて接近して居つて、文學を文字で書き記したものが、そのまま一個の美術品とも考へられ、その紙なども、様々の色の紙を使つたり、或は美しい模様の入つた紙を使つたりして、それに優美な文字で大和假名を書く。かういふ紙や文字や、その中から映發せられた一つの雰圍氣といふものが、物語の世界にびつたりと合致して來る。つまり、物語の内容だけではなく、その本を見ることが即ち既に藝術の雰圍氣に觸れる感觸を持つてゐたのである。そのみならず、又それらの作品には、繪を澤山挿入した、所謂繪卷物としても行はれて居つて、宇津保物語の繪卷なども、ずつと古くから出來てゐたらしく、現代に傳へられる宇津保物語の本文には、繪卷物の繪詞が入つてゐる。源氏物語や枕草子の繪卷物なども古くから種々傳へられてゐるのであつて、さういふ繪と文字との移り變りといふやうなものが、極めて日本的な美術の特色ある境

地を作つてゐるのである。繪は繪、文は文といふやうな、別々のものではなくして、文と繪との間からして、物語の情緒といふものが流れて、これを讀み、これを見る人の心にしみ込むのである。そこにわが國の古代の物語の世界が、藝術的香氣を高く薫らせる所以があつた。

このやうな美術的雰圍氣を持つてゐる中古中世の物語文學が、やがて近代になると、二途に岐れて、繪を主としたものと、文字を主としたものとなる。さうして繪を主とした方面は、多分に古代の繪卷物の流れをひくものであつて、しかもそれが次第に墮落したものとなつて來る。これが奈良の繪師などの手で大いに作られた奈良畫といふものの中に流れ込んで行く。

奈良畫は、金泥を澤山使つて、見た眼には極く美しく彩色せられてゐるけれども、その繪は稚拙であつて、しかも金泥のごときもので誇張せられたところに、古代の大和繪の、むしろ墮落して卑俗となつて一面が見られるのである。併し一方においては、その稚拙な風趣の間に、今から見れば甚だ古雅な情調を汲み取られる點がないでもない。

かういふ繪を主とした文學の流れの一面においては、他方には、又讀むことを主として、文字をもつて書かれる内容に主眼點を置いた文學が現れるやうになつた。室町時代の御伽草子と言

はれるものは、元來は古代の繪卷物が、零落して稚拙となつたもので、單に文字として讀む文學ではなく、むしろ繪を主とした婦女子の爲めの作品であり、且又その内容は、民間の口碑、傳承の間から生まれたものが多い。この時代には佛教的影響が非常に濃厚であつて、民衆信仰としての佛教の傾向が、御伽草子の中にも強く現れてゐるが、一方では古くからある織子苛めの物語や、或は動植物類が人間的な行爲をする擬人物の物語や、一寸法師、物ぐさ太郎、文正草子のやうに、人に顧りみられぬ變人が意外の出世をする物語や、浦島太郎、大江山の酒頭童子のやうに、童話的、或は説話的要素を含む物語など、種々の作品が現れて、御伽草子と一般に言はれるやうに、今日のお伽噺の源流と目せられるものも、そこには見出すことが出来る。

かういふ作品の間にあつて、「さゝれいし」と題する御伽草子があるが、これはさゝれ石の姫宮といふ方に、薬師如來が遣はされた金毘羅大將が、瑠璃の壺を捧げる。ところがその壺の中に不老不死の薬が入つてゐるので、今まではさゝれ石の姫宮であつたけれども、今度はその名を變へられて、いはほの宮といふことになり、壽命を非常に長く保たれるのである。

此壺に妙薬あり、これすなはち不老不死の薬なり。これをきこしめされば、御年もよりに

まはず、わづらはしき御心ちもなく、いつも變らぬ御姿にて、御命の終もなく、いつまでもめでたく榮え給はんとて、かき消すやうに失せにけり。さゝれ石の宮、此壺をうけ取らせ給ひ、あらありがたや、年月願ひ奉るしかたとて、三度禮し、良薬嘗め給ふに、あまき味ひ言ふばかりなし。青き壺に白き文字あり、よみて御覽すれば、歌なり。

君が代は千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりて苔のむすまで

とあり。これすなはち薬師如來の御詠歌なるべし。それより御名を引きかへて、いはほの宮とぞ申しける。

かういふわけで、この歌を薬師如來の詠歌であるなどと言つてゐるが、さういふところに佛教信仰の強い影響を見るときも、又神仙思想の流れも著しく認められるにかかはらず、この作品に現れてゐる『君が代は——』といふ歌に國民の理想を寄せた内容は、極めて短い作品ではあるが、御伽草子の中でも注目すべきものの一つとなつてゐる。かやうにして、今日の國歌は、民間的な信仰を集めてゐて、極めて古くから廣く行はれて居つたことが分るのである。

かういふ御伽草子の系統からして、近世には假名草子といふものが現れて來る。ところが假

名草子になると、御伽草子のやうに、繪と文字とで、模様のある立派な紙に書かれてゐて、文學と美術の織りなす奈良畫本の美しさを味はふといふのではなく、むしろ繪の方はつけたりで、假名文字で書かれてゐる作品そのものを讀むといふことが主になつて來た。これが即ち假名草子と言はれる名稱の謂れである。

假名草子は大體において御伽草子の流れを引き、その外に新しくこの時代になつて作り出されたものも多く、しかも佛教信仰の外に、儒教の影響も濃厚であるし、又神道的觀念も見られ、殊に神儒佛の三教一歌といふことが、この假名草子の思想の基調として種々に現れてゐるのであるが、少くとも神道を特に學ぶとか、或は神の道において生きるとかといふことではなくして、むしろ神道觀の中に佛教の強い影響を見たり、或は儒教的な考へ方からして神道を眺めるといふやうな作品が多い。

併し假名草子は、單に文學作品として作り出されたものばかりではなくして、さういふ宗教觀を含めてゐるとか、或は又創作に依つて、旅行案内の代りをつとめる旅の知識を與へるとか、漸くこの當時世の中が太平となつて、東西諸方の交通も盛んに行はれるやうになつた時代の要

求に應じようとした啓蒙普及の傾向が、假名草子の特色であつて、即ちそこには實用的意義といふものが甚だ濃厚なのである。

これを假名草子と言ふのは、他に漢文で書かれた儒書、佛書、醫書の類が、太平の世の中となつて種々印刷、出版されるやうになつたからして、さういふ、謂はば硬派の出版物に對して、特に啓蒙的な、假名ばかりで書かれた乃至は假名を主とした出版物のことを、假名草子と稱したのである。

かういふ假名草子の間からして、時代の傾向は更に文學的進歩を促して、ここに浮世草子が現れるやうになつた。浮世草子といふのは、浮世のこと、即ち現代のこの世の中のことを觀て世相を考へ、これを文字に書き現した作品である。

浮世草子は井原西鶴に依つて創められ、都の錦とか、錦文流とか、西澤一風とか、そのほか様々の群小作家に依つて、模倣的作品が出た。併し西鶴の作品がこれを代表するものである。

西鶴は、當時の物質慾を最も強く表現した作家であつて、そこには精神的な反省といふやうなもの、極く僅かしか認められない。「一代男」において、人間の物質的、肉感的欲望の限り

を盡くした主人公は、最後には最早この世の中では自己を満足させることが出来ないからといふので、好色丸といふ船に乗つて海外征伐に出かける。一見これは當時の町人の發展的氣概を示して、勇敢に海外と貿易を行はうといふやうな氣持を諷刺したものと考へられるが、しかも一面においては、その權利慾、物質慾といふものは、到底精神的な意味での日本的性質と考へることが出来ないものがある。謂はば商都の大阪が發達させた一種の町人氣質といふものは、道義よりも、むしろ如何にして金錢を蓄へ、世に自己の物質的な名聲をうたはれて、浮世の樂しみを盡くすかといふところに、根本の生活態度がおかれてゐたのであつて、極めて現世的な、極めて現金な、むしろその爲めには日本的性質さへも犠牲に供して悔いなきやうな傾向をさへ示したのが、この西鶴の文學に依つてうかがはれる、當時の町人生活の、眞實の姿であつた。

しかも西鶴は、さういふ物質慾、肉慾に汚された町人の魂を謳歌するかのやうに描き出すのみで、そこには別に何等の反省も行はれてゐないやうである。若し反省があるとすれば、それらの物質、權勢をば喪失するやうな愚な道義を、町人道に反する誤つた正義感として考へる程

度のものである。

しかし西鶴は一方では、精神的世界として武家の社會を描いてゐる。それが「武家義理物語」とか「武道傳來記」とかの作品となつて現れたが、これらの武士道を重んじる武士の社會を描く時に、西鶴は町人の物質慾を描くのと同様に、武士の精神的道義を、あまりに誇張して描いたために、そこには現實の觀念からは遠く離れた似而非武士道が表されてゐるのみである。つまり、町人の精神をもつて見たところの武士道であつて、それは決して武士道としての眞實の精神に立つて武士社會の現實の生活を書き現したものとは思はれない。このやうにして、西鶴が描かうとした人間生活といふものは、國民の理想よりは遙かに遠いものがあつた、といふことを知らなければならぬ。この西鶴の卑俗な觀念に較べると、近松門左衛門の方が、もつと人間の情味に徹した眞情といふものを感じさせるのである。

西鶴においては殆ど人間の心情といふものを滅したかのごとき感じがせられて、ともすればふてぶてしい物質慾の權化でなければ、義理の固まりのやうな非情の人間を描いてゐる。ところが近松の方は、人間の情味の豊かな人物が登場して來て、しかも社會的な桎梏の義理といふ

精神的な道義感との矛盾衝突に泣く、美しい人間の心情を描き出さずとしてゐるのである。この義理と人情との衝突、さうして又それが渾然と融和した解決の間からして、人間生活の倫理性といふものが表されて来る。この身心の調和が即ち誠の世界である。ただ義理とか人情とかいふものを強調する點に、儒教的影響が強く現れてゐるが、殊に當時の義理の信條は、儒教が民衆道徳として非常な勢力を持つて來た證據である。これが幕末の社會になると、文學の面には、觀念的な存在に過ぎないものとなつて来る。

さういふ義理とか人情とかいふものを、倫理的な觀念として言はないで、人間の眞心から自然に溢れ出るところの情味といふものに、古代の物語の世界に描かれる所謂もののはれの本性を見ることが出来るのであつて、このもののはれの中に、むしろ日本的な眞實の情愛といふものが現れてゐる。それはわれわれが單に哀れに悲しく感じるといふばかりでなく、人を憐れみ、人に同情する心持である。さういふ古代の物語の世界に現れてゐる愛情を、日本的な眞實の精神に近いものと考へるとき、近世の小説の世界に描かれた義理や人情といふものは、非常に社會通念の低劣なことを表してゐると言はなければならぬ。しかもその義理や人情を、

極めて觀念的に誇張して取り扱つた西鶴にいたつては、近松門左衛門の作品に較べても、日本的道徳觀から見れば、一層低劣な世界を描き出したものと言はなければならぬ。さうして、かういふ社會に生きた西鶴の精神も亦極めて卑俗なものがあつたと考へられるのである。

ただ西鶴の寫實力といふものに非常な驚きを感じる者もあるけれども、それは一面から見れば、西鶴が談林派の俳人として、俳句的なものの見方や、又俳句的表現に依つて修業せられた獨特の文學的素地があつて、かうした文學上の教養が小説の世界に生かされたところに、もの見方や、文章の表現に、一種の魔術的な魅力を發散してゐるのであつて、その點は西鶴の才能を疑ふことは出来ないと思ふが、しかもその文學觀や世界觀の低さにいたつては、到底他の浮世草子の作者の低劣さを何ほど拔き出さるものではない。

近松門左衛門の系統を引く淨瑠璃の世界においては、犠牲的精神の發露した種々の高い道徳世界が描かれて、忠臣蔵や寺小屋や、その外の名作を生み出すにいたつたが、さういふ日本的道徳觀の源は、やはり近松あたりに起り、更にその勇武の世界は、甚だ荒唐無稽に墮してゐるとは言へ、古淨瑠璃の金平淨瑠璃にも見ることが出来る。この金平淨瑠璃においては、勇猛な

荒武者の金平が、悪を懲らし、正義を助け、邪を討ち、悪魔を退治するといふ、極めて朴直な正義的觀念からして、その武勇を發露してゐる種々の物語が存在する。さういふ金平淨瑠璃の流れや、近松門左衛門の淨瑠璃の流れや、さういふものを通して、淨瑠璃世界に共通する、普遍的な一つの倫理性といふものを認めることが出来る。併しながら小説の面においては、さういつた倫理觀念の流通を殆ど認めることが出来ない。もしあれば、それはむしろ淨瑠璃などの影響である。かういふ意味から言へば、日本の道義性の上で、近世小説の持つ價値は、極めて低い所にあると言はなければならぬ。

西鶴時代においてもさうであるからして、西鶴以後になれば、この傾向はますます甚だしくなつて行くのである。即ち浮世草子の末流である八文字屋本、この八文字屋本が減んだ後に、更に江戸に發達したところの洒落本が、あまりに風紀を害するといふのでこれ又禁止された後に、これから岐れたところの中本、即ち人情本とか、滑稽本とかいふやうなものになると、いよいよ近世小説の卑俗性が濃厚になつて来る。しかもその近世小説の卑俗性は、當時の低劣な町人社會の現實を、そのまま描寫しようとする試みとともに、一面において肉慾的であり、物

質世界を崇拜する觀念が強烈である爲めに、ますますその度を加へるといふ結果になつてゐる。そこには、何らの眞實の追求も理想の表現も見られないやうな状態である。

當時においても、かういふ傾向が眼に餘るものがあつたので、洒落本や人情本のごときは禁止せられ、洒落本の作家である山東京傳や、人情本の作家である爲永春水は處罰せられるにいたつた。

併しながら一方においては、儒教的な勸善懲惡主義が濃厚になつて來たので、爲永春水のごときも、その人情本においては、常にこの勸善懲惡主義といふものを表に掲げて、これを説くがごとくに見せかけざるを得なかつた。つまり、今日の言葉で言へばカムフラージュである。さうして「いろは文庫」のごとく、忠臣藏の世界を採り入れた人情本さへ出たのである。

かういふわけで、勸善懲惡を表面に掲げてゐるが、しかしその裏には物質的頹廢の情念をひそめた作品が溢れ出て、世に行はれるやうになつた。これが江戸時代の末期的現象を示すものであつて、つまり江戸時代は最早さういふ物質の世界と、頹廢の生活とからして、どうしても幕府が倒れて、一應社會が瓦解し、新しい眞の日本的な社會を建設せざるを得なかつた機運に

到達してゐたのである。そこに維新があつた。

「風來六々部集」に見えてゐる讀本といふ語は、すべて文字を主とした本を言ふのであつて、殊に浮世草子以來の系統を引く卑俗な町人藝術に較べて、むしろそれよりも稍々高級な、知識階級を目ざし、特に武士の間などに愛讀されてゐた系列の小説がある。これが眞實の讀本と言はれるものであつて、早く國學者達がこの方面の創作に従事し、漢學者も亦このやうな創作を出した。殊に漢學者の作つたものには、支那の翻譯小説が多く、國學者も亦その影響を受けて、多少支那の小説に取材したやうなものが出てゐる。併しその間にあつて、國學者の作つたものには、さすがに日本の古典の影響を受けた作品が著しい。かの本居宣長でさへも、源氏物語の補作小説である「手枕」を作つてゐるからである。特に萬葉集に取材した作品としては、建部綾足の「由良物語」があつて、これは由良の湊の三莊大夫の傳説を中心として、萬葉集の歌を澤山挿入した作品である。この外に同じ建部綾足の「本朝水滸傳」を見ても、萬葉集の歌などを殆どその儘採り入れたりして、古典の歌を新しく創作の中で生かさうとした、新時代的な試みをしてゐるのである。

併しこの點で最も特色があるのは、上田秋成の「鴛鴦行」といふ作品である。これは高市黒人が朝廷の用事で、遠江の方に旅行して、その途次に様々の歌を作るといふ體裁であるが、萬葉集の黒人の旅行歌がその中に巧みに配置せられてゐる。萬葉集の中でも、人麿と同時代の騷旅歌人として、その名手をたたへられ、又赤人と同様に、自然の形象と心を巧に描き出した歌人として認められてゐる、高市黒人を主題としたこの作品のごときは、さすがに上田秋成の如き見識を持つ國學者にして、初めて試みる事が出来る創作であらう。

かういふ人々が國學者の側から出てゐる作家であつて、綾足、秋成、何れも眞淵系統の國學を修めた人物であるとともに、又藝術家的な肌合ひを豊かに持つてゐる人であるからして、普通の學者とは、その生活振りにも、その性格にも、非常に違つたものがあつて、豊富な學殖とともに文學的才能に恵まれてゐたのである。この二人のごときが、江戸時代の作家としては、大いに注目すべき人物であらう。

ただ秋成は宣長に反對して、いろいろその異なつた意見を述べてゐるのであるが、それは一方において、近代人的な自由主義的傾向の強いもの、宣長の國家の精神に生きるといふ確乎

たる信念に立つものに較べると、かなり秋成の作品の精神に就いては注意しなければならぬものがある。殊に秋成の世をすねた隠士的な態度から現れる意地の悪さといふものは、俳人の一茶を思はせるところがあつて、素直に人の心にしみ入るものとはならない。これは秋成の缺點と言ふべきであつて、この點を無暗に面白がるのはよくないと思ふ。

綾足は繪にも勝れ、又俳句を巧に詠み、歌は元より嗜むところであり、又別に古代の片歌を現代において復興しようとして、片歌の道守と號し、片歌を盛んに宣傳したが、これはあまり世に行はれなかつた。とにかく綾足は、このやうにあらゆる方面に非常な努力をした天才で、しかも世の中を漂浪して歩いて、故郷の津輕を出てから、遂に熊谷で死ぬるまで、誠に數奇な運命にさいなまれたが、綾足自身が既に小説中の人物であると言ふべきである。その「源氏物語」を現代的に譌案して、和歌の代りに俳句を入れた「俳諧源氏」は、やがて柳亭種彦の「修紫田舎源氏」の試みの先驅となつた。つまりそのやうに創作的天才を持つてゐた人で、他人の糟粕を嘗めずに、自ら獨創して、新しい試みを世に起さうとしたのである。その多くは實がならず成功を見なかつたけれども、併しその天才的な事業の中には大いに見るべきものがある。

この秋成、綾足と並んで、同じく當時の天才作家に平賀源内がある。一名風來山人とも言ふ。この人も亦數奇な運命を送つた人であるが、その作品は滑稽本の源流となつた様々の滑稽な文章を描き、「放屁論」のごとき痛快な諷刺を持つ文章もあれば、洒落本も作り、或は又狂文として、後世の狂歌、狂文の範となるやうな種類の文章も作り出だせば、淨瑠璃も盛んに作つてゐる。就中「神靈矢口渡」の如きは、今日でも上演せられてゐる名作である。

さうかと思ふと、礦物や自然科学の方面に熱中して、エレキテル、即ち電氣に興味を持つて發電機を作つてみたり、或は火浣布と言つて、火にも焼けない布を作らうとしてみたり、或は又、全國からいろいろな礦物の類を集めて、さういふ地方の物産に就いて研究し、以て日本の自然科学の發達に貢献しようとするところがあつた。併し世間の人々は、この礦物や種々の物産を集めてゐるのを見て、山師であると言つて罵倒したが、それにも屈しないで、礦産物類の展覽會を開いて、この方面の認識を進歩させようとしてゐる。最後には人を殺して、遂に牢獄に入つて死んだといふやうに、誠に數奇な一生を送つた人であるが、その作品に見える痛烈な諷刺や、種々の獨創的な試みを企ててゐる天才的頭腦や、或は自然科学にまで手を伸ばして、

以て國家の増産に寄與するところあらうとした見識などは、大いにこの人の生涯を價值づけるものと言つてよい。

このやうな數奇な運命にある天才が、世の中に容れられないで、世間の常識的な人間から相手にされず、白眼視せられた爲めに、却つて世をすねるやうになつて、奔放不羈の生活を送り、それが爲めにその人物をして大成させることが出來ず、小道に屈せしめた感があるのは遺憾であるが、若し今日江戸時代の文人にして、最も價值あるものを選ばうとすれば、浮世草子の徒よりも、むしろこれらの人々の中に、眞實の人間性と、日本人的な魂を守る者を見ることが出來ようかと思ふ。

この點から言へば、風來山人の「そしり草」のごときも、物部守屋、聖德太子を始め、楠正成にいたるまで、四十人に近い人々に關する論纂で、或はこれを謗り、或は又謗る者に對してこれを駁するといふやうな態度で、人物を評傳した史論の書として注意すべきものがある。その中には特に正成を稱揚して、

正成一人未だ存命と聞し召されば、聖運を可_レ被_レ開と思召され候へと言ひしは、高慢自贊

の詞にして、然も後醍醐帝聖運を開かれしは、楠が功にはあらず。

などと、正成を謗る者があるのに對して、大いにこれを論駁し、

正成可_レ死時を知りて討死を遂げしは、智有り勇有り。元來最期に臨んで、嫡子正行へ遺言に、至忠金鐵の志は日を貫く事、太平記を讀みて感涙に咽ばすと言ふ事なし。徳を子孫に残して三代の節義を守る。然らば正成死すと言へ共死せず、湊川の石碑に、武徳精忠赫々として萬世に朽ちず。是を以て離倫絶類の英雄たる事を知るべし。

と楠公をたたへてゐるのは、偶々平賀源内が單に世にすねた生活を送つてゐるものではなくして、正當な歴史觀に養はれてゐるその識見を見るべきである。

福澤諭吉のごとく、その町人哲學の立場からして、赤穂義士の復讐などについても、八公、熊公のやる類と同様である、といふやうに極言したのものもあるが、かういふ立場から見れば、正成の湊川に於ける忠死も亦極めて價值低きものと思はれるかも知れない。現に風來山人の「そしり草」に記すところによつても、正成が湊川で戦死したことを以て、徒に何の功名もなく討死をして、多年の忠義を一時に失つたものである、といふ批評があるのであるが、このやうな

俗論に對して風來山人は痛烈な駁論を加へてゐる。このやうな正成觀であるとか、或は赤穂義士觀や乃木大將の殉死に對する考へ方などには、やはりこれらの行爲をもつて無意味な、價値なきものとして批評する者もないわけではない。併し眞に國家を思ふ者は、何れも正成に對し、赤穂義士に對し、決してその眞實の精神を見誤ることはなかつたのである。このやうな歴史觀の根據に立てば、風來山人の「そしり草」の如きも亦、日本的な歴史觀を持つてゐるものと言ふべきで、この點からして風來山人の文學觀といふものも、もう一遍考へ直されるべきであらう。その諷刺が、徳川幕府に對する一つの反抗精神を示してゐるものとすれば、「風流志道軒傳」でいたづらに大言壯語し、世を誇り散らしてゐるやうに見られる、風來山人の態度の中にも、又彼の國を憂ひ世を思ふ精神はこもつてゐるのである。

秋成は「雨月物語」の作をもつて有名であるが、この「雨月物語」の怪談小説は、近路行者の「英草紙」とか、「繁野話」とかいふ、支那の作品を翻譯した小説に淵源してゐるのである。その源は更に溯つて假名草子の中の、淺井了意作といふ「御伽婢子」にも見られるのであつて、これも亦支那の怪談小説として有名な「剪燈新話」「剪燈餘話」などを翻譯したものである。就中

『牡丹燈籠』の話は有名で、今日まで演劇や講談などに傳へられてゐるところである。さういふ怪談小説の流れを引いて、上田秋成はその陰的な性格をこゝで大いに發揮して、怪談小説に老巧な妙味を傾注したのである。

これらは何れも文章が稍々難しく、或は擬古文的なものもあり、或は漢文直譯的なものもあり、何れにしても古文や漢語の難しい言葉を使つて居つて、普通の民衆は讀むのに一寸困難であるが、知識階級からは大いに喜んで迎へられた。

これを更に平俗にしたものが、江戸末期の讀本と言はれる一類の小説であつて、これらの小説は、洒落本が彈壓せられたので讀本に轉向した山東京傳や、或は曲亭馬琴などといふ人々に依つて作り出され、特に曲亭馬琴の諸作は、讀本を代表するものである。「里見八犬傳」のごときは、世界でも有数の長篇小説と言ふべきで、これを作る爲めに、馬琴はその一生の全精力を打ち込み、晩年には眼が見えなくなつて、これを書き續けることが出来ない爲めに、息子の嫁に口授して、漸く完成させるにいたつたといふやうな努力を續けたのである。

讀本にいたつて、勸善懲惡主義といふことが、濃厚に、強力に且又自覺的に主張せられるや

うになつた。馬琴はいたるところで勸善懲惡を主張し、又その作品の中に出て来る人物も、この立場から表現して居つて、悪人は徹底的に悪人であるが、しかもその終りをよくせず、善人は又極めて觀念化された一つの善人の型を作り上げて居つて、一時は悪人に苦しめられても、結果は榮える。従つてその善人は、社會生活において如何なる苦境に陥つても、決して道徳に反するやうな行爲はしないといふわけで、非常に健全なやうであるが、しかもその描寫の間にはかなりに卑俗なものが現れてゐて、當時の頹廢趣味といふものが、馬琴の作品の中にも流れ込んでゐる事實を見逃すことが出来ない。この馬琴に依つて代表される勸善懲惡主義文學は、明治の新文學にいたつて、坪内逍遙の「小説神髓」により、徹底的に批判せられた。

併しながら、坪内逍遙の英國的な文學觀から打ち立てられたリアリズムの考へ方と、支那的な儒教の道徳性を、日本の武士道的な考へに依つて新たな生命を與へた馬琴の勸善懲惡主義と、どちらが日本的であるか、さうしてその日本的な精神を文學に生かす態度や方法において、どちらの場合が正しいか、更にそれが現實のわれわれの問題として、どのやうに採り上げられるべきか、更に又、それらを今日の作品の創作に當つては、どのやうな實踐の下に生かされるべきであるか、といふやうなことは、今日改めて考へられなければならない、重要な問題であると思ふ。

何れにしても、逍遙の英國的なリアリズムの考へ方が長く尾を引いて居つて、遂にそれが自然主義的な發展を見るやうになり、更にその末流がどのやうな態度をとつてゐるかといふことは、明治、大正の文學史がよくその事實を示すところである。かういふリアリズムの態度に對して、改めて日本的道義觀に立つ新しい文學の觀念が要請せられ、そこに文學の世界においても國民的倫理性といふものが打ち立てられるべきである。かういふ面から見れば、馬琴の勸善懲惡主義に立つた創作上の實踐といふものが、當時の武士達の切實な要求に出てゐる點などを考へ合はせるとき、その位置についても改めて見直す必要があるのではないかと思ふ。この點、英國的自由主義の寫實精神で馬琴の藝術を否定した明治式文明開化の文學觀の方が、むしろあらためて批判せられるべき立場にあると言はなければならぬ。

以上は讀本と稱するものであるが、これを讀本と言ふのは、別に繪を見ることを主とする本があつたからである。これを草双紙と言ふ。草双紙は元來子供の讀物から出たものである。御

伽草子は、繪と字の緊密な連繫の下になつてゐるのであつて、必ずしも繪を主としてをるといふわけではないが、近世となつては別に新しく子供の爲めの繪本が發達して來て、子供に見せるのであるから、表紙なども赤くしたので、これを赤本と言つた。かちく山、花咲爺などのやうに今日も行はれてゐる童話が、古くは赤本の内容でもあつた。

ところがやがてその内容が稍々複雑となつて來て、殊に淨瑠璃などで喝采を博したものを巧みに繪本に採り入れるやうになり、これを幼稚な子供向の赤本とは違つた色の表紙で現したので、青本とか黒本とかいふものが發達して來た。いづれも表紙の色から出た名稱である。

この青本、黒本が變化して、やはり繪を主としてはゐるけれども、その行文筆致において、又現代社會を取り扱つてゐる内容において、全く大人向となつたものが黄表紙である。これは特に表紙を黄色にして、從來の子供向の赤本類とは區別したのであるが、その内容には、當局の政策について諷刺したものがあつたりしたので、中には禁止の命を受けた作品もある。一方においては洒落を入れたり、未來の空想を誇張して描いたりした、非常に滑稽な作品もあれば、又教訓向の作品もあるといふやうに、千差萬別であつたが、これらはいづれも毎頁繪が主とな

つてゐて、繪の餘白に説明が加へてあるから、繪解き小説とも言ふべきものである。即ち繪と文章とが全く一體となつて、大いに効果を發揮したので、この黄表紙においては、畫家の巧拙が非常に重要視せられた。それで黒本などでも鳥居清經のごとき畫家の作り出したものが多いのである。

黄表紙は分量の短いものであるが、あまりに短くては飽き足らないので、後にはこれを長くして、長篇小説にして出すやうになつたのが合巻本である。黄表紙の數卷分を一部に合冊したといふ意味で、表紙も從來のやうに黄色なものではなく、當時印刷術が發達して來たので、錦繪表紙の華麗なものを使い、内容は非常に長い長篇小説となつてゐる。その代表作家は柳亭種彦で、「修紫田舎源氏」は最も喧傳せられた。その外「白縫譚」であるとか、「釋迦八相倭文庫」であるとかは、特に長い長篇小説であつて、數代に亙り、數十年に跨がつて師匠からその弟子へ又その弟子へと代々書き續け、出版し續けて、漸く完成したといふやうな作品も、種々見えるのである。「修紫田舎源氏」のごときは、幕府の大奥の模様を描いてゐるといふ嫌疑を受けて、遂に作者の種彦以下は罰せられて、その完成を見るにいたらなかつた。

この合巻本も、やはり繪が非常に重要視されて居つて、「修紫田舎源氏」が喝采を博したのは、寧ろ繪の爲めであるといふので、畫家の豊國と作者の種彦が喧嘩をして仲違ひをした。といふやうな話さへ傳へられてゐる。

この毎頁繪を入れて、合巻本を作つて居つた戯作者達が、明治時代になると新聞記者になつて、當時の小新聞の續き物には、何れもこの戯作者達が筆を執つて居つたからして、小新聞には盛んに繪を入れた。これが今日の新聞小説の、毎回必ず繪を入れるといふ習慣の源になつてゐるのであつて、謂はば今日の新聞小説は、合巻本の變形だと言ふことが出来るのである。

これらは繪を主としてゐるのみならず、その文字は殆ど全部假名書きであつて、漢字は全く使つてゐないと言つてよい。それが爲めに婦女子でも讀めるので、年少な子供や、或は女達の讀物として行はれてゐた、謂はば一種の大衆文學であつた。それで中には知識階級向の「里見八犬傳」を卑俗に焼き直した、婦女子向の「犬の草紙」といふ合巻本なども出てゐるのである。

黄表紙と言ひ、合巻本と言ひ、繪は當時の有數の浮世繪師が描いたものであつて、風俗的に見ても興味の深いものがあるが、その作品の内容にいたつては、勿論婦女子の爲めに作られた

卑俗低劣な作品であつて、殆ど言ふに足るものはない。

ただ合巻本においては、時代思潮の影響を受けて、やはり勸善懲惡主義が盛んに強調せられ、又儒教道德に依つて、婦女子が固く貞操を守るといふ精神の堅持せられてゐる傾向は、特に注意しなければならない。

十、國學と近世和歌

皇風の和歌は、近世國學の勃興に伴ひ、新たにその自覺を確立するにいたつたものである。もとより國學に依つて和歌の眞意義が確立する前にも、さういふ方向に向ふ漠然たる摸索はあつたけれども、十分なる自覺の文學としての存在を見なかつたのである。

舊風の和歌の系統に立つものには、細川幽齋を始めとして、その流れを引く堂上方の歌があり、一方において木下長嘯子の如き新しい傾向を示したのもあるけれども、要するに木下長嘯子の特色は、世をすねた、隱遁的性格のところの本體があるのであつて、眞の皇風に即した和歌とは言ふことが出来ない。國學が契沖、及びその友人であり、先輩である下河邊長流に依つて自覺せられるとともに、一方においては新しい和歌の叫びが、江戸の戸田茂睡あたりにも見られた。併しこの戸田茂睡の傾向は、やはり木下長嘯子などと氣脈を共通する、世を白眼

視した隱遁的傾向があるのであつて、眞の皇風和歌の自覺といふやうなものとは稍々性質が違ふのである。國學の歴史が、近世における皇風和歌の歴史と並行し、相伴つて發達して行くのであるからして、國學の實踐が同時に又皇風和歌の自覺史を示すものでなければならぬ。

國學は契沖を鼻祖とするのであつて、契沖が水戸の徳川光圀の委囑に依つて「萬葉集代匠記」を書いた時、その總釋の卷頭にまづ記した詞は、即ち「本朝は神國なり」といふ力強い宣言である。これは彼の吉野時代に、國體の自覺が北畠親房をして、「大日本は神國なり」と叫ばしめたその精神の流れの上に立つものであつて、國學の鼻祖の契沖が、この言をもつて萬葉集の註釋を始めてゐるといふところに、重大な意義が認められるのである。しかも契沖は又、その總釋において、支那の學問は理を先として事を後にする、わが國の學問は事を先として理を後にする、といふやうに、我と彼の學問の研究の方法や、態度の差を意識して、國學の基づくところを明確に道破したのは、既に國學の方法論を自覺してゐるものと言はなければならぬ。従つてかういふ態度の上に立つた契沖の研究が、わが國體の認識によつて築かれたものであることは言ふまでもない。

ただ契沖は僧侶であつたが爲めに、その國體認識には、甚だ佛敎的影響の著しいものがあることを辭まれない。それ故近代の論者の中には、純粹の神道的觀念に立つならば、佛敎的影響の多い契沖や、又國學の四大人の一人、荷田春滿の神道理論には、儒敎的影響の深いものがあるからとて、これらを退けて、賀茂眞淵から眞實の國學が存すると見るべきである、と説く者もあるし、或は賀茂眞淵でさへも、未だわが國の道に關する徹底的な認識には缺ける點があつたからして、眞實の國學は本居宣長に起るとする論者もあるほどで、つまり純粹の國體認識といふものが、どれほどに自覺され、徹底して行つたかといふ、その程度の差に應じて、眞實の國學の意義や内容についても、いろいろな解釋が出て來るのであるが、併しながら、やはり國學の鼻祖として、これらの流れの源は、契沖から始まつてゐるといふ事實を否定することが出來ない。のみならず春滿も、又眞淵も宣長も、何れも契沖の著書に依つて國學に入る動機を作られ、或は契沖の著書に依つて大いに啓發せられて、その研究の態度や方法を自覺するにいたつた點があるのであつて、そのやうな影響力の上から見ても、契沖の存在は否定すべからざる國學の遠祖となつてゐるのである。

つまり、契沖に始まつて宣長、篤胤と傳へられて來るまでの發展の中に國學の存在が見られるのであつて、道の自覺の完成は宣長であらうが、さうした完成期のみならず、源流に始まり完成に到達する全體をもつて、國學の意義を持つものと解さなければならぬのである。

契沖は萬葉集の全註の祖であり、萬葉集を最も徹底した國學的態度と方法をもつて研究して、詳細な註釋を上げた「萬葉集代匠記」の著者であるといふ點において、契沖の皇風和歌の意義の闡明に關する位置は、不動の立場を占める偉大なものとなつてゐる。併しながら契沖自身は、未だ歌の方向については、何ら明確なる指導精神を持つてゐたとは言はれない。その點は荷田春滿になると、例へば有名な、

ふみ分けよ倭にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは

といふ歌に依つても、その精神のほどが明らかに知られる。即ち春滿のこのやうな歌が、皇風和歌の眞實の祖となつてゐるのである。

この傾向をもつと押し進めて、萬葉集の心と形とを、現代的に生かさうとしたのが、賀茂眞淵であつて、眞淵及び眞淵門下にいたつて、初めて皇風和歌の眞實の隆盛時代を將來すること

が出来た。

眞淵は直接春滿に就いて國學を學ぶとともに、契沖、春滿が主として關西にゐたのに對し、眞淵は最後まで江戸に留まつて、この土地に國學と和歌を教へ廣めて、時代の要求するままに、大いなる國學の進展を圖ることが出来たのである。眞淵の著書の中でも、「國意考」並びに「歌意考」は、國學の見地に立つて、文化、文學の本質を明らかにした、國學精神を發揮した最初の著書と言つてもよいものであり、又その「爾比末奈妣」(新學)は、國學の立場から、わが國の文化、文學を研究しようとする者に對する手引として、最初に出た恰好の入門書である。

「爾比末奈妣」において、

そもく上つ御代々々、そのやまとの國に宮敷きましし時は顯には建き御稜威をたて、うちには寛き和をなして、天の下をまつろへまししからに、いや榮えにさかえまし、民もひたぶるに上を貴みて、おのれも直く傳はれりしを、山背の國に遷しまししゆ、かしこき御稜威のややおとりにおとりたまひ、民も彼につきこれにおもねりて、心よこしまになり行きにしは、何ぞの故と思ふらむや。其ますらをの道を用る給はず、たをやめの姿をうるは

しむ國ぶりとなり、それが上に、からの國ぶり行はれて、民上をかしこまず、よこす心の出来しぞ。

このやうに言つてゐるのは、國學精神の端的な表現であつて、上代精神を敬仰するとともに、外國の思想が入つて來てから、一層國民精神が衰へて、後世になるほど、これを失つてゐることを歎いてゐるのである。而して、「爾比末奈妣」には、

古への哥はよるづの人の眞ごころ也。その眞心をいふゆゑ由を知るときは、何か及く物あらん。教の道も有りと、常にしもならはしがたければ、時過ぎて忘れやすきを、哥はいとまある時にみづからよむものからに、教へずして直くまごころになりぬめり。是ぞ此かしこき神皇の道也ける。

このやうに言つて、歌は眞心の表現であり、教訓や理窟をもつてしては、人の心を眞心にすることが困難な時でも、歌によつて自然と人の心は眞心に適ふものとなる。これが即ち神皇の道であるとして、歌と國體精神との一致を考へてゐる。ここに皇風和歌の理念が確立されたのであつて、かういふ考へのもとに眞淵は歌を教へ、又自ら歌を作つて行つた。

わが國の國花である櫻は、本居宣長の有名な歌、

敷島のやまと心を人とはば朝日ににほふ山ざくら花

によつて、廣く喧傳せられてゐるが、眞淵も亦櫻花の潔い美しさをたたへてゐるのであつて、例へば、

もろこしの人に見せばやみよしののよしのの山の山櫻花

のごときは、如何にも櫻花に象徴せられた、わが國の純粹な精神を表現してゐる歌と言ふことが出来る。

眞淵の門からは、數多の學者、歌人が輩出して、ここに鬱然たる國學の發展を示すにいたつた。その眞淵の門下の中でも、伊勢の本居宣長は、最も偉大なる學者であるとともに、わが國體精神を明確にして、國學の中心理念を確立した思想上の偉人でもある。

又江戸の橋千蔭や村田春海は、短歌の方面において、勇壯な中に優美な格調を含み、謂はば古今調と新古今調の融和した一體の歌を詠んでゐる。更に新萬葉調としては、田安宗武、楫取魚彦の如き人々が現れ、又その門下の谷眞潮からは、土佐における歌道や學問が開けて行つて、

殊に萬葉集の研究が次から次へと進められ、遂に國學の流れの遠祖となつた「萬葉集代匠記」に匹敵する、偉大なる萬葉研究の綜合成果とも言ふべき幕末の大著、「萬葉集古義」が、鹿持雅澄に依つて完成せられるにいたつた。雅澄は土佐國學の最後の仕上げを行つた人であり、又、國學全體としても大きい足跡を残した學者であるが、その門下からは、武市半平太や吉村實太郎のごとき志士を出してゐる。

宣長の著書の中で、最もわが國の道を明らかにして、國體の本質を究明し、國家精神の大道を國民思想の上に打ち立てたものは、「玉くしげ」「直毘靈」「馭我慨言」「葛花」等の諸書である。この中「馭我慨言」には「馭我」といふ言葉が用ひられてゐるが、この馭我といふ言葉は、我夷を制御するといふ意味で、わが國が外國を指導して行く精神を表現したものであり、この心持を端的に言ひ表せば、攘夷といふのと同様の意味にもなる。攘夷といふ語は主として水戸學の方面から言ひ出されて來た漢學的な語であるが、國學の方では、それに相當する意味をば、馭我といふ言葉で表現し、宣長以後國學者の間に、この言葉が廣く用ひられてゐるのである。この書はわが國と外國との交渉を歴史的に述べて、その中にわが國が海外の地を治めた上代精

神の逞しさを明らかにするとともに、後代になるほど、室町將軍のやうに、かの國に媚び諂つた態度をとる者が出たことを慨歎し、眞に國民精神が昂揚して國體に歸一した外交の必要を主張した書である。即ち單なる歴史家の歴史學といふのではなくして、その根本には、かういふ精神があつて、確乎たる思想に基づき、明かな識見と主張をもつて、外國との交渉史を描いてゐるのである。客觀的敘述とか、單なる事實の歴史とかいふことではなくして、該博なる知識に依る考證の上に立ちながら、根本的に國學の精神や思想を失はない態度を採つてゐる。ここにわが國に於ける學術研究の最も勝れた方法が暗示せられてゐる。それは、國體精神に徹底した歴史觀、世界觀に立つてゐるからであつて、今日のごとく客觀説明の學問方法とは、根本的に立場が違ふのである。「葛花」は市川匡麻呂といふ者が「末賀能比連」といふ書を著して、宣長が「直毘靈」で述べてゐる點を反駁したのに對して、更に宣長が痛烈な駁論を加へて、その國學的立場を明確にしたものである。

宣長がわが國の道を明らかにした中心的な著書としては、「直毘靈」と「玉くしげ」が挙げられる。「直毘靈」は、宣長の畢生の名著である「古事記傳」の總論の中に掲げられ、「玉くしげ」は「秘本玉くしげ」とともに、紀州公に奉つたものである。

宣長がわが國の道を明らかにしようとする精神は、特に「古事記傳」に依つて、實證的に發揮せられてゐるのであり、古事記を眞に體得することが、即ちわが國家の本質に徹底する所以であると信じて、古事記の研究に渾身の努力を注ぎ、その一生を捧げてこれを完成するとともに、その出版、刊行のことにいたつては、宣長の歿後遙か後年にいたつて、門弟の盡力に依り、漸くなし遂げることが出来たのである。その中には、あらゆる文化、風俗、言語、思想の各方面からの、綜合研究の粹を盡くして、古事記の言葉と事柄とを明らかにするとともに、更にその奥底に横たはる精神に入つて、古事記の本質を明らかにしてゐる。その註釋の書を傳と言つてゐるのは、即ち古い傳へをその儘に現代に明らかに現すことに依つて、わが國家の最も純粹な姿に還り、その心を今日に復活せしめようとした考へに出てるのである。「古事記傳」といふ書名の中にも、宣長の深い心がこめられてゐることを理解しなければならぬ。

言葉を解釋して、その事柄を明らかにし、遂にその精神の本質的なものに到達しようといふのが國學の研究方法の段階であつて、ここに言葉と事柄といふコースが辿られる。さうしてそ

の結果としてわが國の道が現れるのである。即ち最も奥深いところ、最も高きところにおいて、わが國の道といふものが嚴然として存在するわけであるが、その道へ到達する爲めに古典を読み、古典を考へ、古典を理解して、言葉と事がらから、次第に高い段階へと上る道を體得し、その精神に生きることが出来るやうになる。これが即ち、國學の根本的な方法なのである。

さういふ國學の研究方法を説いた名著としては「うひ山ぶみ」がある。この書に依つて國學の研究方法やその精神を明らかにし、その學問の中心點となるところを、特に力説して、

さてその主としてよるべきすぢは、何れぞといへば、道の學問なり。そもく此道は、天照大御神の道にして、天皇の天下をしらしめす道、四海萬國にゆきわたりたる、まことの道なるが、ひとり皇國に傳はれるを、其道は、いかなるさまの道ぞといふに、此道は、古事記書紀の二典に記されたる、神代上代の、もろくの事跡のうへに備はりたり。

と、このやうに述べて、道の本質と、道の顯現とを明確に論じた。

このやうな宣長の國學の主張を歌で詠み表したものが「玉鉾百首」である。この「玉鉾百首」

にいたつて、皇風和歌の最も高き表現を見ることが出来る。その中には、

物皆はかはりゆけども現神わが大君の御代はとこしへ

とか、

百八十と國は在れども日の本の是の倭にます國はあらず

などのごとく、わが國家の勝れた美しさを歌ひ、且又神代の八十神々の御働きなどを詠じて、わが國の道の眞姿を遺憾なく歌に依つて詠み表すとともに、又わが國の歴史を詠じて、蘇我氏の專横を憤り、承久の變に於ける北條氏の大逆を慨歎したやうな、烈々たる氣魄と批評の眼を以て國史に對してゐるのである。そこからして、又吉野時代の忠臣をほめたたへる歌も多く詠み出されてゐる。

眞淵の思想は宣長に依つて偉大なる發展を遂げ、むしろ宣長に依つて國學の完成があつたと見られるのであるが、江戸の橋千蔭のごときも、

あまの原よさしまつれる日の御神照らさむ限り國は動かじ

とか、

みとらしの梓の弓は神代よりわが大君の守なりけり

とか、國家精神を體得した歌を詠み出で、村田春海も亦、

天地の神や固めし萬代に立てて動かぬ國の御はしら

とか、

神代より神のたからととる弓を守りとなせる國ぞ此國

とか、わが國體の本質を明確に表現した歌も詠み出でてゐるのである。このやうにして、眞淵の門下にいたり、皇風和歌はいよいよ發展を見るにいたつた。

宣長の精神は種々の方面に大きな感化を與へたが、特に平田篤胤が宣長歿後の門人として、この道の精神を唱へて、破邪顯正の筆劍を揮ひ、遂に宗教的信念に依つて神道の改革を完成したことは、宣長の學術方面の改革とともに、わが國の精神史、思想史上に偉大なる貢獻を齎したものであるとして、特筆しなければならぬ。

篤胤は、わが國の道を單にわが國のものだけにとどまらしめないで、世界萬國に行き互るべき道であるとして、儒教や佛教のごとき外國の道がわが國より出で、又インドや支那のごとき

も、わが國の古代において、祖神の神々の經營し給うたところに文化の發展を見た、といふ見地から、その研究を行つたのである。即ち宣長の馭戎の精神を徹底させて、これを歴史、言語、文化の諸方面から立證しようとして、篤胤はその渾身の精力を傾けて、研究を續けたのである。この篤胤の偉大なる精神が幕末維新期の風雲をはらむ社會に多大の反響を捲き起し、しかもその國體精神に徹底した熱烈なる信念が、有形無形の影響を與へて、幕末の切迫した社會情勢に照應して、維新運動における多くの勤皇家志士を生み出すにいたつた。

篤胤は、宣長の「古事記傳」に倣つて、「古史傳」を書いた。これも非常なる大著であるが、その全部の刊行は、漸く大正年代に入つて、篤胤の全集が刊行せられた時に、その完成を見るにいたつたのである。篤胤の考へでは、古傳の真相を正しく傳へたものは、祝詞が第一であるとし、その次に日本書紀をおき、更にその次に古事記をおいて、これらを最も尊ぶべき神典であるとしたのである。即ち宣長の古事記を第一とする考へ方から見れば、かなり違つた方向になつてゐる。かくて、篤胤は神代史及び上代史を古史と言つてゐるのであるが、その古史を明らかにする爲めには、單に古事記なら古事記といふ一書だけに據るのではなく、古史を傳へて

みるあらゆる典籍の中からして、比較研究により、その眞實の姿を見出して、古史を明確に把握しようとした。

それで篤胤の「古史成文」は、古事記や日本書紀などの一書だけに據ることなく、祝詞や、風土記や、古語拾遺や、あらゆる典籍の勝れたところ、古史を明らかにし得たといふ點、更に言靈の妙を發揮した表現の部分を、綜合集成して作り出されたものであり、この「古史成文」を註釋したのが即ち「古史傳」である。又「古史傳」の外には、系圖や年表を添へて、あらゆる方面から古史を闡明しようとしたのであつて、その精緻な學問的態度は、飽くまでも科學的である。更に「古史成文」の一々の語句の出所を明確に記して典據を示したのが「古史徵」であり、それらの根拠となつた古典について解説を加へ、その價值を説いて、上代古典の研究に志す者の手引にしようとしたのが「古史徵開題記」である。これらに依つて古史一般に關する研究の全部が、綜合的に、且又有機的に組織せられてゐるのである。

この篤胤の歌は、すべて皇國の道の精神に依つて詠み出だされ、當時の平俗な歌や、題詠に據る歌の弄びやを退けた。さうして、

帝すまみの道唯一つこをおきてあだし小みちによらめやも人
とか、

ひむがしの大樹おほきのもとの神がたり四方よしの草木も言ことやめて聽け
の如き、雄大、莊重なる歌を詠み出してゐるのである。

篤胤の門下からは、大國隆正や、矢野玄道や、鈴木重胤のごとき、國學者を出すとともに、佐久良東雄のごとき勤皇歌人や、或は、足利三代將軍の木像を、三條河原に梟首して、遂に罰せられるにいたつた長尾郁三郎、仙石隆明、その他の勤皇家を出し、殊に平田篤胤が最も眼をかけて居つた門下の生田萬のごときは、天保の飢饉の際、柏崎で窮民を助けるために、大阪の大鹽平八郎の事件に倣つて、代官所に斬り込み、遂に殺されてゐるが、この萬の歌も亦、篤胤と同様に男性的な道の歌が多いのである。佐久良東雄は、櫻田門で井伊直弼を襲撃した、水戸浪士の一味の者を匿まつた爲めに捕へられて、獄中で死んでゐる。このやうな維新時代の行動家もその門下には少くないのである。

東雄の歌では、

飯食ふと箸をとるにも大君の大御恵みと涙し流るのごとく、常に大君を思ひ奉る誠忠の心が現れ、しかも、

君がため朝霜ふみて行く道は貴く嬉しく悲しくありけり

といふ悲壯な大義のための忠死の精神をうたつた勝れた歌もあり、何れも誦してもつて國民精神の作興に資すべき歌である。

生田萬の歌では、

世の人はふみも分けずやさもあらばあれ我ひとりゆく神のまさ道の如き、道の精神を歌つた歌があり、大國隆正には、

親のため常は惜しみて事しあらば君ゆる捨てむ命なりけり

など、憂國の至情に溢れた歌が見られ、矢野玄道にも亦、

神ろぎの神のみことの道をおきて道ちふものは世になきものを

の如き道の歌があり、開化の世となつて復古の實の行はれざるを慨歎する歌を詠んでゐる。

大君のみさきに立ちて萬代に草むすかばね仕へまつらむ

とつ國の草木もなびけもしきの大内山の春のはつ風

と忠君の至誠を表したのは、鈴木重胤の作である。仙石隆明は、

よしや身はいづこの浦にしづむとも神や守らむ九重のには

といふ辭世を詠んで死に、長尾郁三郎も亦、

君がため死なむとおもひさだめては獄のうちはもののかずかは

といふ獄中の歌を遺してゐる。これらすべて篤胤の精神が、維新時代において、種々の方面に實現して行つたことを示すものである。

土佐には又優れた歌人が出てゐるが、就中大倉鶯夫と鹿持雅澄が優れ、鶯夫は、

天皇は神にしませば千よろづの神を御先のおさへとなしつ

と詠じ、雅澄は、

神風に息吹きやははれ沈きつつ後悔いむかもおぞの亞米利加

といふ、今日の豫言のごとき歌を遺してゐる。

このやうに地方歌人には多くの優れた國家精神に生きてゐる人々を輩出したのであつて、特

に岡山の平賀元義、福井の橋曙覽のごときは、烈々たる國家精神の氣魄において傑出したものがある。元義には、

事しあらば火にも水にも大君の爲めにぞ死なむ年は老いぬとも

のごとき、勤皇の歌があまた見られ、曙覽にいたつては、更にその國家精神が力強く發揮せられて居つて、赤心報國七首のごときは、特に曙覽の志が、明かに現はれてゐる歌である。

國を思ひ寝られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな

には、悲壯な志士の心がみなぎり、

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはば畏みまつれ

には、純眞な勤皇の精神が溢れてゐる。

この曙覽は、飛驒の國學者田中大秀の弟子で、田中大秀は、本居宣長の門弟の中でも、傑出した一人であつたからして、曙覽のかういふ忠誠の精神の中には、やはり國學の傳統が流れてゐるのである。

曙覽の弟子に芳賀眞咲があり、眞咲は又平田篤胤歿後の門人として、篤胤の養子鐵胤に贅を

執つた。この眞咲の子が芳賀矢一である。従つて芳賀矢一には、やはり國學の血が流れてゐることを考へずにはをられない。即ち初めに總論で述べた芳賀矢一の國文學に對する考へ方は、このやうな國學思想から出てゐることが知られるのである。従つてその歌の中にも、

外國ちうごくの書まが見て知りぬ日本の本の國にまされる國はあらじと

のごとく、勤皇愛國の心に溢れた歌を種々見出すことが出来るのである。

福岡の大隈言道は、飄逸な歌を遺してゐるので有名であるが、その門下からは勤皇女性として有名な、野村望東尼を出したことに依つて記憶せられなければならない。野村望東尼は博多を通過する勤皇家に種々の援助を與へて、勤皇家の母と言はれ、同じ黒田藩である平野國臣のごときは、非常に望東尼の世話になり、又長州藩でも、高杉晋作、或は清水寺の僧月照のごとく、福岡に頼つて來た勤皇家で、何れも野村望東尼の世話を受けない者はなかつた。さうして黒田藩の勤皇家が歌を詠むこと多きも亦、野村望東尼の感化に依るところが少くないのである。併し望東尼は遂に捕へられて、長門の姫島に流刑になつたが、長州藩の志士に依つて救ひ出され、最後は周防の三田尻で病死した。

誰が身にもありとは知らでまどふめり神のかたみの大和魂の如く、大和魂を歌ひ、或は又、

千萬のものの司といふ人ぞなかなか天あまに地つちに背ける

の如く、要路の者に對し、諷刺の意を含めた歌もある。

越後の良寛は、萬葉調の歌を詠んだ歌人として名高いが、むしろその隱遁的な、又、子供を愛し、純真で靜寂な境地に安住した心境の中に、多くの人の心を惹きつけるものがある。

月よみの光をまちて歸りませ山路は栗のいがの多きに。

のごとき、自然な愛情の現れた歌が見られる。併し、積極的な力強さに乏しく、又、あまりに萬葉集の模倣の跡の著しい憾みがある。決して世俗が推稱するほどの歌人ではない。

眞淵系統以外の國學者や歌人も多く出てるが、學者としては橘守部、富士谷御杖、歌人としては小澤蘆庵、香川景樹などが、眞淵系統に對立する人物として著しい。

守部は獨學で、國學の精神を明らかにした優れた學者であり、その意見は終始宣長の學說に反對するところがあつた。宣長の體験的な考へ方に對して、守部は著しく合理的傾向が濃厚で

ある。併しながら國學の道に立つた學者には違ひなかつた。宣長が古事記を重んじたのに對し、守部はそれと反對の立場を採り、日本書紀を重んじて、「いひみち稜威道別」の如き神代卷並びに神武天皇卷の註釋をしてゐる。特に古代歌謡の研究においては、前人未發の研究をなし遂げたのであつて、その該博な知識と斬新な卓見は、今日においてもその右に出づる者がないと云つてよいほどである。又宣長の「いひみち馭我慨言」に匹敵する著書としては、「いひみち歷朝神異例」があつて、事ある時に、神々が種々の神威を現し給うた事實を、歴史的に述べることに依り、國體の眞義を明かにし、國家意識を固くさせようとしたのである。

富士谷御杖は、京都の學者で、文法に詳しく、又、言靈を古典解釋の根本として、表と裏の兩面の觀察からして、古典の意義が明かにせられるとした。就中、その神道と歌道とを同じ道の兩面とした見解は費ぶべく、感情を歌として表現することにより、調和の世界を得るところに神道に通ずる救ひの意義があるとした見識を認めなければならぬ。併し、歌としては舊派の系統に屬し、多くの注目すべきものはない。

小澤蘆庵と香川景樹は、國學者の萬葉主義乃至萬葉的傾向があるのに對して、古今主義とも

言ふべき意見で、蘆庵は、普通用ひられる日常の言葉で歌を詠むべきものであるといふ「ただことうたの説」を主張し、景樹は、歌は喜怒哀樂の人間の感情が自然にこもるべき調べを持たなければならぬといふ「調べの説」を主張した。併しそれらの歌は、いづれも優美、典雅な趣を持つもので、國學者の歌に、多かれ少かれ國家的精神が漲つてゐるのに對して、むしろ花鳥風月的な傾向が濃厚である。

宣長の養子となつた本居大平は、やはり宣長の精神を受け繼いで、國體に關する多くの歌を遺し、又萬葉集の中から特に國家的な歌を選んで、「萬葉山常百首」を著してゐる。更に「倭心三百首」は、宣長の「玉鉾百首」の精神に即して、道の心を三百首の歌に詠んだもので、

天の下常磐堅磐に治まれるわが大君の御代はやす御代

の如く、わが國家の安泰隆昌を歌ふとともに、又日常生活の器具や藝能、その他の種々の文化方面にわたつて、國家精神によつて、そのものの本質を歌ひ表してゐる特色ある歌集である。このやうな歌集は、鹿持雅澄にも見られるのであつて、その「千首のくり言」と題する歌集は、更に歌の數が増して、千餘首に達し、わが國の道の精神を各方面から歌ふとともに、又

わが國の歴史を、歌に依つて詠み表し、逆賊を筆誅し、忠臣を稱揚してゐるのである。

大平は紀州公に仕へて和歌山に住んでゐたが、その大平の弟子で優れてゐるのは紀伊國續風土記を編纂した加納諸平である。この諸平の弟子に伴林光平が出た。伴林光平の經歷は、佐久良東雄に似たところがあつて、二人ともと僧侶であつたのが、國學を修めて、國學精神に目覺めるとともに、國學は儒教、佛教のごとき異端を排斥してゐるのであるから、繚然として佛を捨てて、還俗した。又、光平は、伴信友にも暫く就學してゐたことがある。信友は、宣長系統の國學者であるからして、何れにしても、光平は宣長の國學の精神を體得した國學者であるとともに、又、歌人としてもすぐれた人物であると言はなければならない。それで彼の寛政の三奇士と言はれる中の一人、蒲生君平が、山陵の埋没を歎き、その研究に異常の努力を捧げたのと同様に、光平も亦山陵研究には多大の功績があるのであつて、實地踏査をして、その御跡を明らかにしてゐるのである。かくて、文久三年にいたり中山忠光を奉じて、南山の義學、即ち大和の天忠組の企てがあるに及び、伴林光平も亦その中に投じて、勤皇討幕の第一聲を擧げるにいたつたが、時期尙早にして事成らず、敗れ去つて、遂に捕はれの身となり、京都の獄で死ん

だ。その天忠組の顛末を和文で綴つた「南山踏雲録」は、勝れた文學であるとともに、又この義舉の始終を記録した書としても、大いに興味を惹くものがある。その辭世とされてゐる、

君が代はいはほと共に動かねばくだけてかへれ沖つしら波

のごとき、雄渾な作も少くないが、ただ師の加納諸平の影響で、優美な古今的歌風の詠歌が最も多い。併しその歌の中には、

おほぎみの醜の御楯と身をなさば水漬く屍もなにかいとはん

のごとき、忠誠の至情を表した作がしばしば見えるのは、さすがに單なる學者、歌人ではなく、勤皇の志が胸中に横溢してゐる志士の面目を見るべきである。

寛政の三奇士（實は寛政の三偉人と呼ぶべきである）と言はれてゐるが、高山彦九郎は、最も忠誠の念に厚い志士であつて、山陵踏査に努力した蒲生君平とともに、その功績は讃へられるべきである。林子平のごときは、海防國策に専念して、藩政對策などについても意見を持つてゐるが、尊皇の至情においては一段下るものがあるであらう。

高山彦九郎は郷里を出でて、京都において皇事に努力を傾け、更に九州方面を遊説して廻る

途中、幕吏の追ふところとなり、遂に久留米において自刃して果てた。その作の中には、寧ろ優雅な歌が少くないが、併し又皇室を思ひ奉る至誠の情の溢れてゐる歌も種々遺してゐるのである。

われを我としろしめすかやすべらぎの玉の御聲のかかるうれしさ

は特に名高い。これは高山彦九郎が交はつてゐた公卿を通して、その至誠の念が上聞に達したといふ話をもれ承つて、感激の餘り詠んだ作である。

蒲生君平にも、

君が爲め國の爲めとし思はずば雪も螢もなにか集めむ

といふ、尊皇の至情の溢れた作がある。

偶々この二人の作には、皇室の衰へさせられてゐることを慨歎して、内裏の小さくましますことを歎いた、

ひがし山登りて見れば哀れなりたなひらほどの大官所

高山彦九郎

比叡の山見おろすかたぞ哀れなる今日九重の數し足らねば

蒲生君平

といふ、全く一致した内容の歌を見出すのは、忠節の士の念慮には、共通するものがあることを示してゐる。このやうな歎きは、又佐久良東雄、その他の人々も歌つてゐるところである。勤皇の運動は、竹内式部の處罰、山縣大貳の處刑となつて、次第にその方向、態度を明確にして來た。ただ山縣大貳が處刑せられた爲め、その書いた碑文が、大貳の郷里甲斐の酒折宮に建設せられる時に、同じくこの宮の碑文を書くことを依頼せられた本居宣長が、この大貳の碑文のことに關し、自分の碑が、彼の處刑せられた山縣大貳の碑とともに建設せられることを快からずとしてゐるがごときは、偶々學者と行動家との立場の相違を示す事實と言はなければならぬ。これらの事件を先驅として、幕末の倒幕維新の運動が、更に大きく巻き起つて來たのである。さうしてその志士達の心を動かし給うたのは、實に孝明天皇の英邁なる大御心であらせられる。宮中におかせられての孝明天皇の御日常を拜聞した志士達は、非常な感激をもつて、朝廷の御爲めに身命を盡くすべき決意を一層強化せられ、その大御心を歌ひ出でさせ給うた御製

を拜誦するに及んで、いよいよその情熱が高まつたのである。

戈とりて守れ宮人ここのへのみはしのさくら風そよぐなり

の御製などは、特に志士達の拜誦感佩申し上げたところである。さうして自ら矛をとつて、九重を守り奉らうといふ情熱が、志士達の心に湧き起つて來た。かくて天忠組の義擧を第一聲として、勤皇討幕の運動はいよいよ盛んとなり、續々と事件が巻き起つて來るのである。

この情勢を驅り立てたものは、安政五年の井伊直弼が起した大獄であつて、多くの勤皇家を捕へて處刑したことが、更に勤皇家の心を湧き立たせた。安政の大獄においては、徳川齊昭が幽閉されたのを始め、吉田松陰、梅田雲濱、橋本左内、頼三樹三郎、その外の有力な志士が相ついで死を遂げた。

かくして水戸藩士の反撃は、櫻田門の事件となつて現れ、井伊直弼は遂に暗殺せられる運命となつた。この事件の連累者として、佐久良東雄のごときが居ることは、前に述べた通りである。井伊直弼の後繼者である安藤信正も、井伊直弼と同じ施政方針を採つた爲めに、水戸藩士その他の勤皇家から狙はれるところとなり、遂に坂下門の事件において傷害せられるにいたつた

のである。

このやうな情勢が次第に激して行つて、様々の事件を起し、寺田屋事件、池田屋事件のことが生じた。寺田屋事件は、薩摩藩士の勤皇運動を、藩主島津久光が抑壓しようとして、鎮壓の爲め勤皇藩士の宿つてゐる伏見の寺田屋に向はせたところ、兩者の間に葛藤が生じて、遂に勤皇藩士を害するにいたつたものである。有馬新七のごときはこの時の被害者の尤なる者であつた。その外この事件に連坐して、薩摩藩士に捕へられた田中河内介のごときは、有名な勤皇家が暗殺されてゐる。池田屋騒動は、同じく京都の宿屋の池田屋に宿つてゐた勤皇家を、新撰組が襲つて、これを殺すにいたつた事件で、宮部鼎藏のごときは、その中でも有名な人物である。

かくて種々の動搖が起り、朝廷の輿論も或は激越な討幕論になるかと思へば、公卿の中には、公武合體論に懐柔せられたものも出て、朝廷の輿論が又軟化するといふやうに變轉して、それが爲めに勤皇藩であつた長州藩は、藩主を始め全部京都から追ひ退けられ、又、倒幕派の公卿七人が長州に落ちのびるといふ所謂七卿落の悲境にも陥るやうな運命に立ちいたつた。その藩主の冤を雪がうとして、家老達が多勢の藩士を率ゐて京都に上つて來たので、遂に禁裏を守護

してゐた會津藩、薩摩藩などと衝突したのが、蛤御門の變である。その結果長州藩は敗退して、多勢の犠牲者を出すとともに、長州征伐の擧が起されて、福原越後、國司信濃のごとき家老がその責任を引き受けて切腹してゐる。又蛤御門の事件では、久坂玄瑞、寺島忠三郎、入江九市のごとき、有力な志士が死んだが、その中には、吉田松陰の松下村塾において養はれた有爲の青年が多いのである。この事件を畫策して、長州藩を動かしたものは、久留米水天宮の神官であり、當時の勤皇運動の頭目であつた眞木和泉守保臣であつた。従つて、保臣も亦、長州の敗退に際し、天王山で同志とともに自刃してゐるのである。

勤皇家の討幕の擧は更に續き、天忠組以後、平野國臣を中心とする生野銀山の企てがあつて、その結果事破れ、國臣は捕へられて、天忠組の人々と共に、京都の獄で殺されてゐる。

又水戸においても、勤皇家と佐幕派との間に衝突が生じて、或は珂珂港において戦ひ、或は筑波山に籠つて戦ひ、遂にこれらが合流して、水戸を出發し、京都に上つて藩の實情を訴へ、藩内の佐幕黨が猖獗を極める勢ひに當らうとした。かくて數百人の一隊は、中仙道を上り、高崎藩、諏訪藩などと戦ひつつ、越前まで來て、遂に加賀藩の軍門に降り、敦賀で多くの者が處

刑せられた。これを天狗黨といつてゐる。その中心人物は、僅か二十三歳の青年藤田小四郎である。小四郎は藤田東湖の子で、水戸學の精神を受け繼いだ青年志士であつた。その上には藩老武田耕雲齋や山國兵部を戴いてゐたが、就中武田耕雲齋は正義の士の長老であり、この事件の爲めに子息達も亦處刑せられ、一家殆ど全滅をみるにいたつたのである。

かういふ事件が次から次へと發生して、遂に明治維新を迎へたが、明治維新以後にも、更に神戸や堺で、外國人を殺傷する事件が續出して、攘夷の精神は實行されてゐた。その系統が、即ち明治九年の熊本の敬神黨（神風連）の事件や、或は佐賀の前原一誠の事件にまで及んで行く。前原一誠は、松下村塾で松陰の教育を受けた一人である。而して、その最後の偉大なる事件は、西郷隆盛を中心とする西南の役で、これに依つて勤皇攘夷の運動には、最後の終止符が打たれて、ここに明治の文明開化期に入ることになるのである。

これらの事件に依つて、多數の人々が死んだのであるが、それらの志士の殆ど全部が皇風和歌を作つて、死して國を守る志を述べ、或は潔く皇事に死する喜びを訴へ、大和魂の雄々しさを讀へて、烈々たる意氣を詠み現してゐるのは、如何に勤皇精神が、和歌の本質と結びついて

ゐるかを示すものである。

次に、以上にその名を掲げた志士の詠歌を、若干記しておく。吉田松陰には、

かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂

身はたとへ武藏の野邊に朽ちぬともとどめおかまし大和魂

のごとく大和魂を詠んだ歌があり、又、

七たびも生きかへりつつえみしらを攘はん心我忘れめや

は楠公の七生報國の意を詠んで壯烈である。特に最期に當つて詠み遺した、

親おもふ心にまさる親心けふのおとづれ何ときくらん

は哀切人の肺腑をつくものがある。

梅田雲濱は、病重つてもなほ、

君が代を思ふ心の一筋にわが身ありとも思はざりけり

と奉公の衷情を歌ひ、頼三樹三郎も亦、

わが罪は君が代思ふ真心の深からざりししるしなりけり

と至誠を披瀝してゐるが、三樹三郎の歌は概して優雅の傾向がある。

櫻田門事件の首領、有村次左衛門は薩摩藩士であるが、

岩が根も砕かざらめやもののふの國のためにと思ひ切る太刀
の詠があり、特に、その母、有村壽蓮尼の、

雄々しくも君に仕ふるものふの母てふものはあはれなりけり

は哀れが深い。又、坂下門事件の連累者の中では、兒島強介一家がすぐれた歌を遺してゐる。

大君の憂きをわが身に比ぶれば旅寝の袖の露はものかは

は強介の作で、

天皇に身は捧げんと思へども世にかひなきは女なりけり

はその母ます子の作、

なすわざも何かめめしくたゆたはんますらたけをの妻とある身は

はその妻光子の作である。

寺田屋事件の有馬新七は歌を多く遺してゐるが、

荒びなす醜とのしこおみ打ち攘ひはつ國知らす御代にかへさん
にはその凛然たる精神が溢れてゐる。

天忠組の義學の頭目中山忠光は、中山家の出であるが、中山家は 明治天皇の御誕生あそばされた御所である。田中河内介は、中山家に仕へてゐたから 明治天皇の御降誕の御用を蒙つたときに、次のやうな感激の情をうたつてゐる。

わが君とわが大臣のためなれば骨を粉にして何いとふべき

骨を粉に碎きてのみか命さへかねてぞ君にゆだねつる身は

なほ 明治天皇の御誕生をもれ承つた佐久良東雄も歡喜のあまり、次の歌を謹詠して中山家に上つてゐる。

名に高きその中山の姫松に天つ日の影豊さか登る

天照らす日嗣の皇子の尊ぞと深く思へば涙し流る

池田屋騒動で難に殉じた宮部鼎藏が、

いざ子ども馬に鞍おけ九重のみはしのさくら散らぬそのまに
と詠じ、蛤御門の變で死んだ久坂玄瑞に、

殿居する大宮人は心あれや御階に風のさくらをぞ吹く

の詠があるのは、孝明天皇の御製を奉誦して勤皇の至情を詠じたものである。更に、眞木保
臣も詩歌の作にすぐれ、獄中で詠んだ、

かかる子を育てしものと今さらに悔ゆらん母の心をぞ思ふ
は哀切である。

生野銀山の義舉の中心人物、平野國臣は特に歌にすぐれ、今様なども作つてゐる。

かくばかりなやめる君の御こころを安めまつれや四方の國たみ

數ならぬ草の下葉の露の身も死なばや死なん大君のへに

のごとく誠忠の情に溢れた作が多く、鹿兒島に入つて畫策したときの作、

わが胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし櫻じまやま

は強い情熱に満ちみちてゐる。

水戸の武田耕雲齋には、

しづたまき數ならねども大君の憂さをばいかで晴らさざらめや

があり、藤田小四郎は、

さく梅の匂ひはかなく散りぬとも香は九重の小簾にとどめん

と詠んだ。

維新志士の作は、もとよりその數が少くないから、ここにはその中、本文に關係ある人々の
詠歌をわづかに出すにとどめたが、大體において、その格調は一貫して悲痛である。普通の歌
に見ることの出来ない沈痛の趣が湛へられてゐる。この悲懷に、皇風和歌の眞趣を見出すこと
が出来るのである。

國學の歌から志士の歌に及び、皇風和歌の精神は一層昂揚せられて、その格調の確立を見る
にいたつた。これを技巧の稚拙などの批評をもつて見る態度は不遜不謹慎であつて、むしろこ
の素朴な中に眞情の流露した作風が眞實の萬葉調であると言はなければならぬ。萬葉精神
は、まさにこの志士の歌にいたつて完全な再建を見ることが出来たのである。

十一、結

語

皇國の文學の種々相に關し、主として文學の形態の方から、考へてみたのであるが、結局わが國の文學に一貫してゐるものは、時代が隔たり、種類が異なつても、その中に國民としての眞實の精神が貫ぬいてゐるといふ事實である。ただそれが多少の弱まりを見せる場合もあるが、併しながら、そのやうに國民精神の衰へてゐるがごとくに見える時代は、一方において最も強くさういふ精神が湧き起らうとして居つた時期である。

就中、歌がそのやうな方面において、特にその存在意義が認められてゐることは、わが國の文學の特色である。即ち足利將軍のごときは、世々歌を好み、家集を遺してゐるのであるが、逆賊の高氏のごときが歌を詠んでゐる一面において、勤皇の戦に従つた多くの忠誠の士も亦歌を遺してをり、ここにその歌が、精神や生活や、行動と相俟つて、眞實の價値を發揮せられる

理由を持つのである。かくて、文學をただ藝術美の上からだけで見ることの謂れなき所以が明らかである。

即ち文學に於ける戦を、劍の戦と同様にここにおいても見る事が出来る。さうして、その文學の戦の何れにわれわれが共感し加擔するかといふことに依つて、われわれの文學における精神が明かにせられるのである。

その何れをも公平に取り扱ひ、文學として勝れてをればどれでもよいといふやうな、客觀的立場に立ち、歌を單に美意識の上から見る態度で文學に對さうとする文藝學のごとき一派もあるけれども、さういふものに依つては、眞實の文學が戦の精神を強く發揮することは出来なない。しかも、文學に働く生命をわれわれの精神において捉へるといふことが大切なのであるからして、菊池武時の歌において生きるか、足利高氏の歌において生きるか、といふことが、大きい文學の問題とならなければならない。そのやうな意味で、この文學史を取り扱ひ、現代までの文學を見て來たのである。

このやうな見地からすれば、外國的な精神において培はれた明治以後の文學には、多くの飽

き足りないものがある。併しその間には、岡倉天心の史論の如き、或は部分的ではあるが高山樗牛や岩野泡鳴の日本主義文學の主張のごとき、その外幸田露伴の東洋精神の文學と言ひ、又近くは倉田百三氏などの日本主義文學と言ひ、その日本的な意味を持つ創作が一つの流れを形作り、特に正岡子規、森鷗外、夏目漱石のごとく、偉大な業績をなし終へた作家も出てゐるのではあるが、併しながら文學界の大勢は、必ずしもこれらの作家を遇するに正當な位置をもつてせず、むしろその在世中には、文學上の位置としては、不遇であつたと言ふべき作家が少なくないのであつて、ここに、近代文學の大きい誤謬がある。そこでは、西洋的な自然主義文學や人道主義文學の跳梁に任せてゐた状態である。このやうな文學の歴史を見る時、今後の文學が如何にあらねばならぬかといふことは、以上に述べて來た皇國の文學の精神に依つて、おのづからに明かであらう。このことは次の時代の文化、文學を擔はんとする若い人達に向つて、特に考慮を促し、その精神の體得を強調して止まない所以である。

單に形の上の美しさとか、或は客觀的描寫とか、或は個人的な人間性の表現とか、或は理論的解釋とかを採り入れた、さういふ文學並びに文學觀ではなくして、根本にわが國家の本質に徹底した思想を養ひ、わが日本の民族精神を體行して、その大道の上に立つて、眞實に洛陽の紙價を高めることが出来るやうな、醇乎たる日本國民の文學を要求してゐるのである。さういふ精神が滿ち溢れて、おのづからに形を整へ、構想を雄大にし、内容を興趣深くし、表現を美しくして、文學のあらゆる技術の方面にまで及んで行かなければならない。併し、何よりも根本となるものは、魂の修練であるといふことを忘れてはならない。さうして、それは即ち今の言葉で言へば、皇國世界觀の確立といふことにあるのである。

このやうな日本文藝の大道といふものは、常に古事記に發し、維新志士の風懷に終る文學の歴史の上に、豊かに漲り湛へられてゐる。又女性としては、眞淵も言つてゐるやうに、平安時代の女性の優美典雅な作品を味はふことに依つて、しとやかでしかも雄々しい日本女性としての文藝上の精神を擷むことも出来るであらう。ここに「ますらをぶり」の文學と「たわやめぶり」の文學が流れてゐる。

このやうにして、文學の大道が、現實のわれわれの精神の要求するところにおいて生かされる時、初めて國民文學といふものも現れ、わが國を代表する文學として、世界にその價値を發

揮することも出来るやうになるのである。それはこの偉大なる發展の時期に生きる青年達が、次の時代に擔ふべき輝く光榮として、遙かに行く手を、大いなる希望と期待とをもつて眺めてゐるのである。

皇國文學史論(終)

(出文協承認
あ250023號)

論史學文國皇



製複許不

昭和十七年十二月二十三日初版印刷
昭和十七年十二月三十一日初版發行

(五、〇〇〇部)

定價二圓二十錢 送料 内地(小包)十五錢
其他(四種)二十錢

著者 藤田 徳太郎

發行者 高木 義賢

印刷者 (東京) 渡邊 一郎

印刷所 東京市小石川區東古川町十番地
中外印刷株式會社

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社

日本出版文化協會番號一六五一五番
東京市小石川區菅野町三丁目十九番地
振替口座東京三九三〇番
電話(34) 代 五三〇〇
六二〇五(長)

— 大日本維新會談社發行 —

金原 著 **東洋美術論**

東洋美術の概観、殊に支那美術と日本美術との交流に重點を置いて東洋美術の特性を述べ、以て日本の自覺を喚起す

B 六判 一・七〇
内地・一五
其他・一六

大串 著 **日本國家論**

日本神話を骨子として、何人にも近づき得べき平明さを以て、日本國家の本質と、その構成諸要素を説明す。

B 六判 一・八〇
内地・一五
其他・一六

保田 著 **古 典 論**

國學の復古精神を根據として、靈道時代に於ける我國詩人の久しき悲願の筆學を明かにしつゝ、國學の古典論を説明す

B 六判 二・四〇
内地・一五
其他・二〇

森本 著 **萬葉精粹の鑑賞** 卷上

思想藝術兩側面兼備の萬葉の特色を發掘し、名歌秀歌について、此の國民的聖典の鑑賞理解を一層押廣めんとす。

B 六判 二・七〇
内地・一五
其他・二〇

小牧 著 **日本地政學**

從來の翻譯的地政學と對比しつゝ、日本の主體的立場に立ちて樹立せる日本地政學を具體的に展開せる名著。

B 六判 二・〇〇
内地・一五
其他・一六

松前 著 **日本技術論**

日本科學技術の發達より説き起し現時に及び、更に將來の工業技術體制を示唆して烈々日本技術道の確立を説く。

B 六判 一・五〇
内地・一五
其他・一六

望月 著 **佐久良東雄**

幕末の勲皇歌人佐久良東雄の純忠無雜な精神と行動とを東雄獨特の萬葉調歌詠を際交せ乍ら叙述した唯一の正傳

B 六判 二・五〇
内地・一五
其他・二〇

七脚 著 **七卿回天史**

所謂七卿落ちを中心として維新直前に於ける尊皇攘夷運動の精神及び真相を叙述す絶對臣民道立場の秋必讀の書。

B 六判 一・八〇
内地・一五
其他・一六

本社への直接注文は、一應在庫品を無有の品で書葉をお合のせ願ひます。

終

